
ルセカーの章

夏川まさむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルセカーの章

【Nコード】
N9741C

【作者名】
夏川まさむ

【あらすじ】
王都サークに流れ着いた少年は、酒場で宮廷騎士ガブレイといざこざに。その場を鎮めたのは、美しい女騎士シースティア・ラ・ソールだった。彼女は少年が英雄と同じ名であることを知る。

序章

星が降り落ちそうなほど満天にまたたく夜、少女は産まれた。
ルセカーよ、少女を守りたまえ。
命運に光明あれ。
行いに誉れあれ。

序章 剣をもつ少年

夕刻の王都。夕日の帯に藍が混じるには少し早い。西の空は、今やつと金色の太陽から橙色だいたいいろを吸い出したところだ。

大自然の時計を頼りに、男は今日の仕事の残りを仕上げに掛かり、女は夕食の炊き出しの準備を始める。あるいは、早々に店を畳たたむ商人。夕刻の閉門に間に合わせるため入都の手続きを急ぐ旅人と官吏。そして、これからが本時の商売、これから賑にぎわう街路。

王都には多くの人間がいて多様。例えば、この王都サークに剣を持った人間が珍しいはずはない。この国には騎士がいて、兵士がいて傭兵がいて。だから、人々のその少年に対する珍妙なものを見るような視線は、彼が剣を持っているという事実に向けられてはいなかった。

当の少年、十三、四の年頃で髪は濃い茶色。それもぼさぼさで、伸びた毛を後ろで結わえてなんとか形になっている。手入れとは無縁の針金のような髪だ。身形は埃っぽい服の上に、なるほど旅の途中で地べたに寝ようが一向に心苦しくもならないだろう、ある意味では理にかなったずたばろのマントが両肩に被かぶさっている。平穩な今時、野良猫の方がましな格好をするというものだ。

加えて、彼が腰に提^さげる剣。少年は、自身の瘦^やせた身体にはやや大きすぎる剣を太い革の剣^{ベルト}帯で腰に吊り下げていた。剣帯はどうか腰骨に引つ掛かっているという程にずり下がっており、その印象はだぶだぶの服を着込んでいる、という感じに似ていた。

人々の視線は剣を持つ事実ではなく、剣を持つに不釣合いな少年の風貌に向けられていたのだ。が、当の少年は好奇の視線も何知らぬ顔で王都の雑踏をゆく。

そんな彼が、ぴたりと足を止めた。まるで突然、吸い寄せられるように九十度向きを変える。彼がくぐったのは、なんということもない、ごくありきたりの酒場である。

そんなところに何があるというのか。

あまりに唐突な少年の行動は、いつそう道ゆく人の興味を引いた。物見高い暇人は、さり気なさを装って酒場へと後追う。そうでない者は、周りの呆気にとられた表情を見て、自分がどんな顔をしているかに気付くと、夕刻の忙しさを思い出して道を急いだ。

道端と同様の視線が、新たな珍客に注がれる。彼を面白がった客の一人が席を空け、店の主人に彼のための酒をつがさせた。

少年の為に混雑した店に道がつくられる。彼は一度だけ立ち止まると、注視の中ゆつくりと歩み寄って、男の隣に置かれた杯を一息に飲み干した。その間に酒を用意させた男の手が少年の剣に延びる。興味が何気なく手を剣へ引いたのだらう。周囲の人々が好奇以外で少年に一目置いたのはこの時だった。

「俺の剣に手を触れないでくれ」

男の手がびくりと止まる。

少年から剣が取り上げられることを予想した人々は、彼が振り向きもせず男の手の動きを察したのを驚いたのだった。

「酒、うまかった。ありがとう」

朴^{ほく}訥^{とつ}に少年は礼を言う。

期待以上に面白い対応をしてくれた少年に、ほう、と感嘆の息が周囲で漏れた。

「なあ」

少年が口を開くと、また人の注目を集めた。今度は何だ。今日はいい酒の肴さかなを得た。

「騎士になるにはどうしたらいいんだ？」

少年は店の親父に向かって言った。

なるほど、彼も同じ年頃の当たり前の少年と同じく騎士に憧れているのだ。そう思うと周囲は少し興醒めきせいめした気がしたのだが、しかし、このやりとりの観衆たちは、思うほどに興味を削がれていないことに気づいていなかった。

「聞き捨てならんな小僧」

新たな登場人物に店内は騒ついた。少年がカウンターから振り返ると、そこに三十半ばというくらいの、マントを羽織みなりった男が立っていた。マントを含めて、整った身形みなりからはある程度の身分が窺える。そう、騎士くらいなのだが、当たり前前の少年が夢見る騎士像はその男にはなかった。そしてこの少年自身も、その男の細長い頭部の上に張りついた嫌味な顔つきから好印象を得てはいないようだ。

「これはガブレイの旦那だんな」

主人が無愛想な顔の上に無理遣り愛想笑いをつくる。少年は店の雰囲気が悪くなったのを感じとった。

「お前のような薄汚いのが騎士になろうものなら、我が国の先行きが危ういわ」

「運が悪いな坊主、やつこさん、眼の上のたんこぶがどうにかできないんで当たり散らしてんだ。適当に相手しとけ」

少年の後ろから主人が耳打ちするのをガブレイが睨にらんだ。主人は知らんぷりをして仕事に戻る。

「随分と大層なものを持っているようだが……」

態度と身長差で見下しながら、ガブレイは顔を寄せて少年の剣帯に腕をのばす。ゆっくりとした語調とは裏腹にその手は素早い。

「……どうせ盗品なのだろう！」

しかし、ガブレイの手は空を掴み、逆に少年がその手首を押さえ

ていた。

「俺の剣に触るな！」

少年の右こぶしがガブレイの顔面に飛ぶ。だがガブレイの方もその手首をあっさりと捕まえた。

「宮廷騎士に対する礼儀ではないな」

ガブレイは少年の腕を思い切り引つ張って、自らの身体を翻した。ひるがえ

少年の身体が勢いよく床に転がる。
「その剣には盗品の疑いがある。取り調べに対して抵抗するというのなら、処断も止むを得んな」

ガブレイは剣を抜いた。まさに言い掛りだ。それを黙って見ているほど、この国の人々は不健全ではなかった。

「横暴だぞ！」

店のどこからか声があがったが、しかしこの騎士の横暴さを制止するには欠ける。

「あんたみたいなのが騎士か。この国、どうかしてる」

少年の独白にガブレイの眉がぴくりと跳ねた。

「剣を抜いても構わんぞ」

「あんたには勿体無くて、この剣は使えない」

恐いもの知らずで言った台詞では、どうやらなかった。額から汗がにじりでている。

「貴様……!!」

ガブレイの反射的な怒りは剣を持つ右腕を振り上げさせた。

「そこまで！」

振り上げられたガブレイの剣を止めたのは、澄んだ女性の声だった。大きな声でもなければ、竦むような恐ろしさも無い。ただ、空気を打つ凜とした声が、剣を持つ腕を制した。

「彼の剣が盗品かどうかはともかく、抜かれていない以上あなたがその剣を振り下ろすのは罪に当たりますよ？ なにせ彼は無抵抗なのですから」

女性の声が指摘する。確かに、剣を抜かない相手に対して、ガブ

レイの行動は騎士道と、なにより彼らが守るべき法に反した。挑発に乗らなかつた少年は賢かつた。それとも本当に意地で抜かなかつたのか。

観衆は、ありもしない少年の思惑に感嘆し、少年を救つた女性に声援を送つた。

「シースティア様だ！」

その女性は、店の奥の卓から騒ぎの中心へと進みでた。彼女の羽織るマントがリズムミカルな歩調に揺れる。マントを留める胸元の留め具はガブレイと同じ、風と芽吹きを具象化した紋章がかたどられたものだ。二人の衣装はまったく異なるから、おそらく平服に身分を示す留め具だけを身につけているのだろう。ということは、彼女も宮廷騎士であるわけであり、すらりとくびれた腰には美しく飾られた腰帯ではなく剣帯が巻かれていた。その姿は男装の麗人、というには、やや似合いすぎた、まったくの騎士姿であつた。

「これ以上、宮廷騎士の名誉と品格を傷つけないで頂きたいものね、ガブレイ殿」

彼女、シースティアは、わずかに赤みを帯びた栗色の髪を肩から払つた。緩やかに波打つ艶やかな髪が背中にする。白いマントに、それはよく映えた。

「やんごとなき身分の方に取り入って手に入れた宮廷騎士位で、騎士道を語られたくはないものだ。それとも貴様の謂う騎士道とは、女の手管のことか？」

「私のことはともかく、あの方の名を汚すことは許さない」

一瞬間いた鋭利な視線が、ガブレイを突き刺した。

「あの方とはどなたのことかな？ 私は君についてまことしやかに囁かれて^{ささや}いる噂について言ってみただが」

「その噂は私も知っていますよ？ その噂の出所があなたであることも。決闘を申し込むには十分な理由になりそうね。もっとも騎士の私闘は禁じられているから、世間で暗黙のうちに行われているように非公式になるけれど。ちょうどいいわ、非公式ならすぐにでも

始められますものね。今ここで」

不敵に、美しい唇が笑みをかたどる。ガブレイがたじろいだのは、本人にそのつもりがなくても周囲にはあからさまだった。彼女を知らぬ男だったならば自信満々に、しかも彼女の美しい肢体に対して邪な欲望を抱きつつ決闘の申し込みを受けただろう。翌朝一番に自分自身の弔鐘を聴くとも知らずに。しかし、ガブレイは知っていた。彼女がこの国で、二の剣の使い手であることを。

「いいだろう！ その小僧の処分は貴様の好きにするがいい！」

頬を引きつらせてガブレイはマントを翻す。かつかつと靴音高く歩くのがせめてもの負け惜しみだ。

「あ、ガブレイ殿？」

女騎士シースティアは呼び止める。

「お聞き分け感謝します」

につこりと微笑む。ガブレイはいつそこの憤怒で顔を赤くした。

酒場は喝采かつさいで沸き返った。

「あんた、なにもんだ？」

洗うのが先決であろうと思われる服から、床の埃をはたきながら、少年は言った。

「さつき言った眼の上のたんこぶだ」

「ちよつと、人をできものみたいに言わないで」

酒場の主人の声高な少年への耳打ちを、シースティアは笑いながら怒った。

「なかなか骨があるような少年。敬意を表して教えてあげるわ。騎士を志す者は、酒場ではなくてまず騎士団の門を叩くものよ。何の身分もないと見習い従者になるのも難しいけど、シースティア・ラ・ソールを名指しなさい。推薦しといてあげるわ。ちようど欠員が出たのよ」

言ってから彼女は瞳を暗く翳かげらせたが、周囲に察せられるほどではなかった。

「恩に着る。それから、前言撤回だ」

「なに？」

「この国どうかしてるって言ったこと……。あんなみたいな騎士がいるんならマシだ」

「過分な褒め言葉ね。でも否定はしないわ」

彼女は騒がせたことを理由に銀貨ひとつで勘定を済ませた。彼女が口にした杯一杯にはすぎた額だ。

「それではね、少年」

それが、少年と宮廷騎士シースティア・ラ・ソールとの出会いだった。

一章 宮廷騎士シースティア・ラ・ソール

1

大商人ポーエックの街道を南下した地に、サーキス王国の王都サークはある。

サーキスは、かつてカルン大河と呼ばれたカルン川流域の沃土による農耕と、その河口におかれた港による交易によって栄える国だ。暦は春、種蒔き^{たねま}を終えたばかりの、新緑も清々しい季節。港の方でも冬時期の海の荒れが治まり、交易船が寄港しはじめて活気に湧く季節でもある。

サーキスという国自体が、繁栄を約束された春の時代にあった。

王都の中心に程近い、つまり王宮の近辺を囲む高級地にソール・デレフ伯の邸^{やしき}はあった。伯は王国の西端に領地を持つ中級の貴族で、普段は領地経営を代官に任せ、宮廷に出仕している。彼には、今年十九になる養女がいた。生まれて間もない友人の遺児を引き取つてはや十九年。いまや彼女は吟遊詩人の美貌麗声、音曲や刺繍など、よほど女らしい事より、剣を好んで女だてらに宮廷騎士を務める市井にも評判の娘である。

今日も、ソール・デレフ伯の邸では庭に並んだ樹木に巣をつくる野鳥で賑やかだ。

季節がくると、毎朝日の出とともに騒がしくなる。その内、巣には卵が生まれ、余計に騒がしさが増すだろう。その光景は、彼女の私室の二階の窓からも見えた。

鳥の声に微睡^{まどろみ}みながら春眠の心地よさに浸っていたが、いよいよ窓から日差しが差し込むようになると、シースティアは観念して起きることにした。明るすぎる朝日が少し眼にいたい。気怠さを感じ

ながら寢床から裸体に近い体を起こす。従者の名を呼んで、あるはずのない返事を待つ。欠伸を噛みながら意識がはつきりするにつれ、その名の持ち主がもういない事を思い出すと、彼女は別の召使いを呼んだ。

年季の入った女の召使いが彼女の身仕度を手伝う間、シースティアは昨日の出来事をおぼろげに思い出す。寝呆けた頭のなかに、それは意味もなく思い出され、そして記憶の引き出しに再びしまわれると、彼女の寝呆けた頭は出仕の遅刻の言い訳を考えることに注ぎ込まれた。

結局、彼女が王城の騎士門に着いたのは、定時を二時間も過ぎてからだった。

騎士門とは、王城にある南向きの正門と残る三方の小門とは別に加えて構えられた南東の門のことを指す。王城の南東にはそこから直通して騎士団の棟があり、騎士門は正門と並んで強固に造られた門であって、武門の象徴といえた。しかし強固といえども、あくまで象徴に過ぎない。王都の外壁を突破されるような戦に、勝ち戦は見込めないからだ。

騎士門に辿り着いたとき、シースティアの頭に騎士長を納得させられる言い訳は思いついていなかった。

城壁を左手に、騎士門をあと二十歩程というところで馬を止めて鞍上で唸る。駄目だ、どうしても思い浮かばない。このまま踵を返して仮病でも使おうか。しかし風邪一つひかない自分が病などと云えば、男どもは嫌な誤解をしてくれるだろう。ことにガブレイなどにはいい嘲笑の種にされてしまう。例え自分が聞いていないところであっても、あの男に笑われるのは身の毛がよだつほど不愉快だった。

思わず想像して眉間にしわを寄せた彼女は、見慣れないものを騎士門の脇に見つけた。塵芥の固まり、ではなくて何かが入ったずた

袋、でもない。シースティアは言葉でそれを表現しようとしてことごとく失敗すると、それが如何なるものかを確かめるためにも、とりあえず騎士門はくぐる事にした。

「シースティア様、おはようございます」

門兵が馬上のシースティアに挨拶する。だが、彼女の視線はすでに正体不明のずた袋にあった。

「おいこら、お前！ シースティア様がおいでになったぞ」

門兵が叱り付ける。すると、むくつ、とずた袋が顔を上げた。ずた袋ではなくて人間だ。それには随分と汚いが一応、という修飾が加わる。

ぼさぼさ頭にほこり模様のマント、腰には剣帯。シースティアは今朝方記憶の隅にあったものを再び引つ張りだした。

「ああ、昨日の少年か！」

「申し訳ありません。この小僧があなたの推薦だとぬかしまして、早朝から入れると騒ぐものですから。念の為、確認しておこうと」
そして門兵は遠慮がちに、

「……………あの、お知り合いなのでしょうか」と付け加えた。

「ごめんなさい、悪かった」

三時間待ったという少年の言葉に、彼女は笑顔で謝った。騎士長に遅刻の挨拶に行った後、彼女の控え部屋でのことである。

騎士の多くは王城内の騎士団棟にある宿舎に寄宿するが、彼女の様な貴族家の子息令嬢ともなると話は違う。また、騎士の位もいくつかに分かれ、この国で宮廷騎士といえば、騎士団の中で特に貴族並みに王宮への出入りに自由が利き、具体的には国王の直臣待遇で玉座の間まで入廷を許された地位にある騎士ということになる。

彼女の場合は貴族でもあり、騎士としても宮廷騎士の地位を持つ、

いわば高級士官である。彼女ほどになると、騎士団内に自室が与えられるわけである。

さて、王城にわずかながらも居室を構える彼女は、非常に機嫌が良かった。騎士長は公用で定時の出仕に間に合わず、まだ姿を見せていないと知ったからだった。

「で、少年。名前を聞いていなかったわね」
「ルセカー」

簡素な木の椅子に座らされた少年は、行儀よく両手を膝の上に乗せて答えた。シースティアは自分の机からそれに向き合った。

「……ルセカー、何？ それとも何ルセカー？」

「ない、ただのルセカー。他にもあったけど、今はそれだけだ」

「なかなか複雑そうね。それに大した名前だわ。ロークアークの騎士と同じ名だなんて」

ロークアークの騎士ルセカーといえば吟遊詩人に歌われるほどの名声を持つ騎士である。ロークアーク地方の戦乱を、その武勇と知略で治め、平和を取り戻したという最も新しい伝説だった。彼はまだ存命していて、三十も越えてはいないはずだ。

「まあいいわ。ともかくあなたは今日から私付きの従者になるわけだけど……」

そこまで言って彼女は少し顔をしかめた。

「……ちよつと、あなた臭うわよ？ ちゃんと宿で湯浴みをしたの？」

「宿には泊まってない。金が無いから」

よくもまあこの王都で警備兵に咎められなかったものだ。夜間においても巡回の兵が厳しく王都を取り締まっている。王都には物乞いなど浮浪者をはじめとする貧民がいないが、存在しないのではなく警備兵がそういった市民権のない者を取り締まって追い出しているのである。

「お金が無いって、昨日の酒代はどうしたの！？」

「あれはどっかのおっさんの奢り^{おこ}だった。酒場の親父に飯も食わせ

てもらったし……見物料だった」

「それでも、あなた旅してこの国まで来たんでしょう？」

少年が旅姿をしていればそのくらいは分かる。少年はごくごく二度頷いた。

「路銀はどうしたの」

「使い切った。一年前に。あとは農家で働いて食わせてもらったりしてたな」

当然、何日も空腹で過ごすこともあった。旅はそんな状態で峠道を歩かせたりと、身体を酷使させることもある。のたれ死に寸前までいったこともあったが、それでもやっていけたのは、ひとえに生き延びようとする強い気概があったからだ。そここのところの説明は、少年は特に加えなかった。

生き延びて、生き延びた先に目的があるわけでもなかった。生きるために旅をしていた様なものだ。今は違うが。

「わかった、ようくわかったわ。あなたが一番最初の仕事は……」

断末魔のごとき悲鳴が、騎士団宿舎の水場から騎士団棟全体に響き渡ったのは、それから数分後、真昼になろうとする時刻のことだった。

何事かと仕事中の者は顔を上げ、厩舎の馬は飼葉桶から鼻面を上げた。手すきの者などはわざわざ水場まで見物に訪れた。

泉水の脇で、シースティアがルセカーの服をひん剥いて手ずから洗ってやっているのを彼らは面白そうに眺めた。彼女手ずから聞くだけ聞いた者には羨ましがる者が多くいるだろうが、手ずから石磨き用のモップを持って、とくれば辞退願いたいところだ。

少年はモップの硬い毛でガシガシと磨かれて文字通り垢剥けると従者用の支給品の服を着せられ、今度は散髪だ。

「なにもう、硬い髪ね！ 洗髪くらいまめになさい！」

銚が刃こぼれしそうな、針金のような髪をばさばさと切り落とす。

小一時間後にはさっぱりとした従者姿のルセカー少年が出来上がったが、見栄えの悪さはあまり変わっていないかった。なにしろ、ぼうがばさばさに変わっただけであるから。

「とりあえず、形だけは何とかなったわね」

溜め息をつくとき、シースティアは腕組みしてルセカーの爪先から頭のとっぺんまでを、一通り値踏みしてみる。

「ほんっと、取り敢えずね」

彼女はもういちど眉根を寄せた。

「ど、どうでもいいだろ、格好なんて！」

顔を真っ赤にしてルセカーは叫んだ。なにしろ、服を残らずひん剥かれたのだ。繊細な少年心は複雑である。

「さてと、最後に……」

「まだあるのか！」

「その剣を預かるわ」

シースは腕組みしたまま人差し指を立てて言った。

「これは駄目だ！」

ルセカーはずたばろのマントにくるまれた幅広の剣を、まるで玩具を取り上げられそうになった子供のように抱き締めた。彼がシースに向ける眼差しは、大切な何かを奪い去られる怯えを含んでいるように見える。それを見たシースティアは、一度つつむいて眼を閉じると、真摯な瞳を静かに見開いた。

「従者は特別な場合を除いて帯剣を許されないわ。あなたが騎士になるまで、あるいは、ここを出ていくことになるまで、私が責任をもって保管します。だから諦めなさい」

今度はルセカーが俯く番だった。計算も何も無い躊躇いの迷いが渦巻く。騎士になる為には剣を渡さなくてはならない。それ以外にはありえない。ただ渡したくないという感情だけが彼を無為に迷わせていた。

「大事なもののなのね？」

ルセカーは頷く。

「約束する、きつと返すから」

子供を諭^{さと}すように彼女は言葉をかける。背丈が頭半分低いだけだが、少年がまだ少年である事に変わりはないかった。

突然、ルセカーは剣をマントごとシースティアに突き出した。

「預ける、それから、子供扱いするな！」

自分がそんな風に諭されていることに気づいた彼は、赤い顔で言った。

「十二、三なんて子供じゃないの」

彼女の方もいたずらっぽい笑みが顔を覗かせる。

「十四だ！」

春はいい。寒暑に悩まされずにすむ。馬上の旅では願ってもない。陽光のきらめきを生命の息吹が優しく照り返すのを暖かく感じながら、騎乗の一行が王都への帰路に歩を重ねていた。

「やれ、身に過ぎる領地というのは、手にも余るものだ。様子を見るだけで骨が折れる」

「お疲れ様でした、閣下。王都に着きましたら、どうぞ羽を伸ばしてお寛ぎくださいまし。幾日かは出仕もお休みになればよろしいかと存じます」

家人の騎士が主人を労^{わづら}う。

「そうしたいところだがな」

苦笑に嘆息を交えて、ソール・デレフ伯爵はそう洩らした。

日々抱えている現実が、穏やかな景色を見ているとまるで嘘のようだ。

伯爵の、真ん中で分けて左右に真っすぐ落とした髪は、元は濃い茶色をしていたのだが、今では灰色が多く占めてしまっている。髪の色を謂うのに、さてどちらを基準にして謂えばよいのか。白髪まじりの茶色か、それとも茶色のまじった灰色だろうか。伯爵の刻んできた苦勞がその髪にあらわれているのである。

今ある苦勞が無ければ、どれほど幸福なのだろう。そう思って、彼は詮のない想像をやめた。今ある苦勞はかけがえのないたった一つの大きな幸せの為にある。それが無ければ、ただひたすらに虚しいだけだ。

「今はただ、この景色のみ」

ひとときの幸福を、彼は満足とすることとした。

ルセカー少年の騎士見習い生活が始まって二週間が過ぎた。まず初日と二日目。シースティアはルセカーが出入り可能な城内を案内して廻ったり、仕事の要領を教えた。ルセカーとしては、シースティアが存外暇そうなので手伝うことも少なからうと踏んだのだが、それこそ存外で、三日目に彼は身分不確かながら騎士見習いの従者に取り立てられた幸運を不幸ではないかと疑った。

従者の仕事は、どうして騎士の手伝いだけなものかよ、と、少年の摘み食いを見つけた騎士棟の料理長が拳とともに彼にのたまったものである。確かにそれは甘かったかと反省はする。しかし少年には、どうしても自分のこなしている仕事量が他の従者たちより多いような気がしてならなかった。周囲で休憩している先任の従者達を傍目に、書類運びから馬房掃除、宿舎の備品の修理に武具の手入れ、用はいくらやってもなくならない。少し経って知ったのだが、用事は自然発生するのではなく、シースティアが作るが見つ付けてくるのだ。冗談じゃない。騎士長のご機嫌取りに彼の雑務を引き受けたシースティアが、その仕事を自分に回してくると知ったときにはさすがに腹が立った。が、その怒りを主張する余力もなく、自由な時間ができる、怒りより眠気の方が先に体に乗っ取ってしまうので環境は一向に改善されず、再び睡魔に屈するという悪循環に陥って数日を過ごしてしまった。最初は余計な思考を持つ暇もなかったが、それでも慣れれば愚痴をこぼすくらいには余裕が出てくる。しかし手が空かない。そのぶん口が達者になるものだ。

「今に見てる、あんにやろっ」

洗濯板に、恨み辛みごと泡^あぶくの衣服を擦り付ける。

「誰が野郎なの」

途端に拳骨が降ってくる。どこかで見張っているのではないかと疑うくらい地獄耳だ。

「まだまだ元気があるようね、明日の仕事も今日片付けてもらおうかしら」

「じよ、冗談だろ！」

城内でのルセカーの仕事はもっぱら雑務で占められ、その忙しさは眼も廻るほどだが、ソール・デレフ伯邸ではすこしゆつくりとできた。シースティアが意地悪く見つけてくる仕事にしても絶対量は知れているし、使用人の女たちや老僕が、なぜかルセカーを気に入ってくれて、彼らがうまいこと彼女の眼につきそうな仕事を片付けてくれたからである。そのおかげで、邸での仕事はシースティアの身の回りの世話がほとんどだった。主だったのが出仕などの身仕度、つまり着替えである。普通の貴族女性ならば、そういった世話は女性が勤めるものだが、騎士であるからには戦場において女性の手は掛けられない。よって普段からそういったことは従者の仕事だった。脱がせて」

うら若い美女が少年相手に口にするには刺激の強い台詞である。最初の日、彼女はそういつてルセカーをからかったが、少年の方は動じずに着替えをこなしてしまった。

「可愛げない」というのが少年の主人の感想である。

その日も、城内のあちこちを駆けずり廻った。仕事はあらゆるところに落ちていて、拾ってくるのはシースティア、こなすのはルセカーだ。君の従者、助かるよ人手をまわしてくれて。そんな会話が聞こえてくる様だ。株があがるのはシースティアであってルセカーではない。

疲れ果てて、帰り道にシースティアの馬を牽いて歩いても、うとうととしていてどちらかというと馬に牽かれていたようなもので、道中の記憶がさっぱりないのがいい証拠だ。邸に着いてからも少々仕事があつて、それは覚えがある。つまるところ、考えなくていい時分は頭が先走って寝ているのだ。

ようやく体と頭が同時に休める時間がきた。他の使用人たちは離れの部屋で一日の終わりを歓談で過ごすのが日課であるようだが、ルセカーにそんな余裕などなく、今のところそれに加わったことがない。

ともあれ、睡眠は何よりも先決事項だった。最近の彼の眠りは至福だ。あてのない旅で不安に包まれながら暗い眠りに就くよりは、考えるまもなく眠りに没頭できる。次の瞬間、

起きたときにはもう朝、というのが毎度のことだったのだが、いい加減身体が慣れてしまったのか、その日、目を覚ましたときには、まだ外は夜闇に包まれていた。

やけに喉が渇く、寝ている間も体力を消耗するというのは本当だろう。その渴きはルセカーにあっさりまじろと微睡みを放棄させた。

ルセカーは慎重に自室を出た。シーステア付きの従者であるルセカーには彼女の隣の小部屋が宛がわれていた。つまりは隣に主人が目と耳を見張らせているわけである。別段悪いことをしている訳ではないのだが、わざわざ音を立てて苦手な人間を起こす手はない。彼女の部屋とは反対の方へ廊下を忍び歩きすると、ルセカーはそつと階段を下りた。

深夜の邸内は初めてである。寝静まった雰囲気からすると、夜が明けるにはまだだいぶありそうだ。

ルセカーはさっそく炊事場へ脚を運んだが、勝手が分からず水桶が見つからないので、裏庭の井戸から直接汲むことにした。

裏庭への勝手口を開く。

そこで、世界の一転を感じる。

静けさをまとう空気に、一瞬圧倒される。そのあとも、胸を締め付けるような雰囲気が辺りに漂った。

空に満天の星が瞬く。その瞬きとともに銀粒子が弾けて降りそう
だ。

それはまるで星降る夜……似つかない名だけど、確かにそれは美しかった。

空に魂を奪われそうになる。星空は天高く、遙か彼方の煌めきが魂を誘って止まない。広い世界に、ちっぽけな人間である自分が心許ない不安感。それでいてこの解放感はどうだろう。

と、星が満天の空からこぼれるように流れた。自然、目線が流星を追う。瞬きほどの間に、星の軌跡は庭の樹に遮られてしまった。ルセカーの視線がそこに移った途端、胸が騒つき始めた。何か不自然を感じる。その樹だけが、景色になりきっていなかった。

誰がいる。

ルセカーは何気なしに井戸に歩み寄り、縄付きの手桶で水を汲む。そして水を移すふりをして別の桶を拾うと、素早く樹の枝を目掛けて投げ付けた。

「誰だ！」

誰何の返答は銀色の刃で返ってきた。引きつった顔をしながら水の入った手桶で飛来する短刀を受けとめる。その隙にも、樹から飛び降りた黒い影が風のような速さで音もなく迫った。

逆手に持たれた短剣が喉笛を掻き切ろうと弧を描く。ルセカーが思い切り仰け反ると首に赤く一筋傷が残った。予想以上に間合いが広い。ルセカーには返す手もないが、手桶の水を浴びせると声を上げて再び誰何した。

「誰だ！」

空桶を叩きつける。受けた刃が木屑を散らす。

「何事！？ ルセカー！」

二階のバルコニーからシースティアが姿を見せた。彼女は曲者を認めると合点して室内に舞い戻る。

「このっ！」

執拗な短剣の突きを凌ぐので手いっぱいだったルセカーだが、侵入者の方にしても少年の思いの外の抵抗で、仕留めるのに時間を取られすぎた。

幾許も経たないうちに、剣を手にとったシースティアが勝手口に現れた。途端、賊は最後の一撃をルセカーに見舞うと塀の方へ身を翻し、恐ろしい速度と跳躍でその向こう側に姿を消した。

「なんて素早い……………」

駆け付けたシースティアが賊を目にしたのは、実にほんの数秒間だけだった。彼女はそのあととすぐには緊張を解かず、周囲の気配と安全を確かめてから息を抜いた。

「大丈夫？」

足元にへたり込んでしまったルセカーの肩に手を置いた。

「……………あ、ああ」

手を伝わってルセカーの緊張がどっと解けたのが分かる。シースティアは少し微笑んだ。

「それにしてもよく賊が侵入したのに気づいたわね」

「たまたま外に出たら、なんか変だったただけだ」

なんか変、というルセカーの感性を理解し難かったが、なんとなく納得はできた。

「でも、賊を発見できたのは運がいいのか悪いのか五分五分ってところよ？」

「……………なんで？」

「あの刺客、王都では有名な暗殺者なの」

「暗殺者が有名でいいのか？」

「存在だけよ、正体は誰も知らないの。とにかく、運が良かったわね。並みの騎士なら、死ぬのも気づかずに殺されてしまうほどの相手だから」

ルセカーはその言葉とわずか数分間の死のやり取りを反芻してごくと唾を飲むと、遅時きながら冷汗が吹き出してくるのだった。シースティアがその賊と以前にも出くわしていたのではないか、そう思ったのは動転した気分が落ち着いた後のことである。

夜明けは何ら変わりなくやってきた。

東の大地と別たれた朝日が邸に差し込んでいる。

邸内では爽やかな朝らしく、白一色の布地と紋様の刺繍で飾られた食卓に、量を抑えて品数をそろえた朝食が並べられる。肉料理は控えられ、スープやサラダ、焼きたてのパンが中心だ。品は有り体だが、種類は豊富だ。

ここ数週間、シースティアはこの食卓に一人だった。母親とは十年前に死別し、唯一の家族たる伯爵が王都を留守にしているからである。一人といっても伯爵家の食卓だ。給仕くらいは付く。ただ、ソール・デレフ家は大貴族というほどの家柄でもなく、伯爵も派手な人柄ではなかったため、客人など席の多いとき以外は、給仕は一人に任せている。

今朝の食卓には、久しぶりにシースティア以外の人数分も用意されていた。彼女のと、伯爵の分、そして普段は別棟で使用人たちと朝食を採るはずのルセカーの分である。

「いやなに、そう固くなることはない。今朝方、旅先から帰り着いたら賊騒ぎがあったというじゃないか。事無きを得たのは、私が居ない間に従者になったばかりの少年のお陰だとも耳にしてね、会ってみたくなったというわけだよ」

ルセカーは初対面である伯爵家の主の声も耳に届かず、ただ得体の知れぬものを見るかのように、食卓の隅々を目だけがぐるぐると見回していた。夕食だって、こんなに皿が並んだのを見たことがない。伯爵家にきてから、それまでとは比べものにならないほど食生活が豊かになったが、使用人が朝食までこうはいかない。量としてはさほど変わらないはずだが、種類の豊富さでルセカーの眼にはそう見えた。

「寝坊したのを叱るつもりで呼んだのではないのだよ。逆に礼を言

いたい気持ちで招いたのだから」

「お父さま、この子は寝坊くらいで恐縮するほど礼儀正しい子じゃありません」

父親の誤解を訂正すると、彼女は少年の額を指で弾く。豆鉄砲を食らったように面食らってルセカーは姿勢を正した。ぼさぼさ頭がひどい寝癖だ。

落ち着いた面差し伯爵はめずらしく破顔した。普段は穏やかに笑みこそするが、声をあげて笑うことなど滅多にない。

「さすがに、エレほど良く出来た娘もそうはおらぬか」

「あの子は……」

その名が出た途端、シースティアは表情を翳らせて俯いた。

「……………エレは特別です」

曇るシースを見、伯爵も沈黙した。親子が黙ると部屋の雰囲気も沈む。ルセカーは居心地悪く感じながら二人が食事を再開するのを待った。ようやく手をつけたパンも、これでは飲み込めやしない。「すまぬ。まだ思い出に語るには早すぎたか」

「いえ、いいのです」

シースティアは急に明るい笑顔をつくって話題をかえた。ルセカーと出会ったときの事、特に騎士ガブレイにしてやった痛快さを楽しそうに語り、ルセカーの度胸を誉め、また彼の城での慣れない働きぶりを笑ったりなど種が尽きない。

親娘の楽しい朝食に交じった後、いつもどおりシースティアの身仕度を済ませてから、伯爵の見送りで王城へ出掛けた。

出仕の身仕度の間、シースティアは笑顔を作ることをやめ、何かに堪えるように押し黙っていた。

「なあ……………聞いていいか？」

出仕の道すがら、シースティアは無言だった。彼女の背中に触れ難いものを感じてはいたが、ルセカーは思い切って訊くことにし

た。

「エレって、誰だ？」

王城への道中で彼女は初めて口を開いた。彼女はなぜかルセカーに馬を牽かせたがらず、ルセカーの先に馬を往かせている。そして振り返りもせずルセカーに答えた。

「エレは、あなたの前の私の従者」

彼女の背中に哀しみを感じて、これ以上は聞いてはいけないと胸の内に感じていたのに、ルセカーは自分の口から追隨する言葉を塞き止めることが出来なかった。

「辞めたのか？」

「今日は随分と聞きたがりやさんね」

驚いたことに、シースティアは笑ってルセカーを振り返った。哀しげな微笑みではあったが。

「答えたくないならいい。悪かった」

今度はルセカーが眼を逸らす番だった。予想通りの答えが返ってくるのに罪悪を感じて。

「死んだのよ」

冷たい表情だった。そこには涙も哀しみもなく、なにかを呪うかのような冷酷さが潜んでいるかのようにだった。

あぶくが、ふわふわと空に向かって舞った。つるりと、虹色に輝く球体の表面をぼんやり眺めながら、主人の後ろ姿を思い出す。

泣いてたのかな。

と、そんな物思いを、元気な甲高い声が妨げた。

「ちよつと！ さつさとしてよ、仕事、片付かないじゃない」

びつくりして振り返ると、赤毛の少女が眩しい陽射しを遮ってルセカーを見下ろしていた。手にある籠は、取り込んだ洗濯物がいっぱいに膨らませている。

「なんだか知らないけどさ、あんたが来てから、ちいっとも仕事が

減らないのよね。いい迷惑よ」

「……おまえ、誰？」

相手の無知に鼻白んだように少女は首を引いた。顔をひきつらせているのは、当然怒りによるものだ、とさえもルセカーは気づかずに相手の沈黙をいぶか訝った。

「誰とは何よ失礼ねー！！」

次の瞬間、彼女の手にあつた洗濯物を、ルセカーは頭からかぶっていた。

「あ、た、し、は、ね！ あんたの尻切れとんぼのきちんと片付いてない仕事をあちこち廻つて尻拭いしている偉いお方よ！」

ふんつ、と鼻息一つ残すと、少女はくると回れ右してすたすた行ってしまう。

「ま、待て」

呆気にとられて気の抜けた声が少女を呼び止めた。少女の方は応じる様子もなかったが、しばらく行き過ぎた後で何かしら思い返したのか足を止めた。

「なによ」

つつけんどんな口調が返ってきてルセカーは困った。思わず呼び止めたが別に用はないのだ。

「あ、おまえ女だよな」

咄嗟、急場を凌ぐ用向きを思いついた。

「あたしのどこが男に見えるっていうのよ！！」

「ち、違う！」

少女が握りこぶしをつくつて肩を震わせたので慌てて宥める。それから、殴られない内に言い訳も含めて続きを切り出した。

「エレって従者のこと、教えて欲しいんだ」

城内で女性の従者はほとんど見かけることがない。数が少なければそれなりの面識もあるだろうとルセカーは考えたのだ。

少女は急に真顔になってルセカーを見つめた。それは、一步引いて警戒した態度の顕れだということがルセカーには分かった。最初

はだれしも他人という旅の出会いの経験が、未知の他者に対する洞察力を、少年に備えさせていた。

「あんた、いったい何者？」

「なに……って、騎士見習いだ」

何者といわれても見ての通り、日は浅いが自分は騎士見習いの従者であるはずだ。だが少女はそんなことを言っているのではなかった。ただ事ではない表情の瞳が、少年の素性探ろうと食い入るように見つめていた。

「どうしてエレのことを知りたがるの」

少女は質問を変えた。

「俺の前の従者で、死んだと聞いたんだ」

ルセカーはごくりと唾を呑んだ。これが正直なところで、それ以上はない。隠すこともなく明かすと、少女に漂う緊張感が解けたのが分かった。

ふう、と少女は息を抜く。

「なんだ、シースティア様の新しい従者ってのはあんたなの」

少女は改めてルセカーを上から下まで観察した。こんな風に品定めされることが多くなったのは気のせいだろうか。

少女は、緊張は解いたが警戒を緩める気はなかったようだ。それほどのが、エレという少女の死にはあったということだろうか。例えば、ソール・デレフ邸を襲った暗殺者とのつながりとか。ルセカーは想像の翼を広げた。だが、広げる羽はまだ小さい。それ以上に思い当る節もなければ確信もない。

「ま、いいわ、教えたげる」

少女は接して良い度合いの線引きを定めたらしく、態度を崩した。「エレはあたしの親友で、シースティア様付きの従者だったわ。気立てが良くて可愛くて、シースティア様もエレをそれは信頼なさっていたの。でも一月前だったわ。シースティア様がお屋敷にお帰りになる途中、刺客に襲われて……エレはシースティア様を守って殺されてしまったの……とてもいい娘だったのに」

心の傷に近づくにつれ、声色は沈む。ルセカーは再び罪悪感に駆られた。

「すまない。思い出させて」

少女は不思議そうにルセカーを見つめた。

「あんた、意外と優しいね」

少女はけるつとした表情で笑う。ルセカーは、まるで嘔泣きにだまされた気分だったがその裏の真実を想えないほど浅はかではなかった。

「その、どんな奴なんだ？ …… シースティア、様、って」

途端、ぽかっと少し小さい握りこぶしが飛んできた。シースティアとの類似点を見つけてルセカーは思った。騎士だとか騎士見習いの女は乱暴だ。

「どこの従者が主人を『奴』呼ばわりするの！」

なつちやあいないんだから、とかぶつぶつと呟く少女であった。

一方でジーンと痛む頭を抱えながら、シースティアを名指しで呼んだことがないのに気づいた。どう呼べばいいのだろう。やはり少女のように“様”を付けなければならないのだろうか。だとしたら最悪だ。

「シースティア様はお優しいから何も言わないだろうけど、きちんとなさいよ？」

優しい？ 少女の認識とルセカーのそれとの相違は突飛だ。

ルセカーの頭のうへの疑問符が見えたのか、少女はまたこつんと頭を小突いた。その時気づいたのだが、少女の背はルセカーより少し高い。

「みえみえね、あんたって」

「いいから教えろよ」

目線をやや持ち上げなければならぬのが癢に触ったが、目で訴えるのには我慢した。

「そうね。まずは何といっても剣の腕ね。この国で一、二。五指には間違いなく入るわ。それでいて宮廷の貴婦人方も見劣りするほど

美しいの。そういった事を笠に着ない素晴らしい方よ。騎士たちも尊敬してるし…………一部例外もいるけど…………。ひどいのよね、リシャル殿下との恋仲を悪く言う輩がいて」

「恋仲？」

これには驚きだ。あんなのを恋人にしたがる男が存在するとは。

まあ見てくれは認めてもいい。しかし、げんこつが飛んでくる数を差し引いて割りに合うのだろうか。

ルセカーには解らない勘定である。

「で？ 相手はなんてったっけ。殿下ってくらいだから偉い奴か？」

「あんた、いったい何処から来たの？ほんとに知らないの？」

少女はルセカーのことをみえみえだといったが、彼女だつて呆れたのがありあり判る。が、そんなことが判ってうれしいルセカーではない。倍に馬鹿にされた気分だ。

しょうがないわね、という顔が、まるで勝ち誇って見えるから憎たらしい。

「リシャル様は、この国の王太子殿下よ。国王陛下がまだ在位にあらせられるけれど、政務を取り仕切ってるのはリシャル殿下だそうよ。知恵と美貌を兼ね備えていらして、もうぴったりのお二人なんだから」

少々興奮気味に少女は語った。

リシャル王子は幼少から利発で評判だったという。王家に対する民の支持が強ければ、国の嗣子は持てはやされて然るべきだろうが、王子は事実聡明であつた。世に謂う神童とは彼のことで、十二で政の場に頭角を現し、十五ですでに実権を握っていた。王はそれほど老齡ではなかったがそれを容認した。凡庸で、疎むどころか逆に王子の台頭を喜んだくらいであるから、権力への執着は最高権力者としては皆無に等しいといえるだろう。国王は王子の主君ではなく、父親だったのである。

ふわふわと舞い上がるあぶくを、やっぱり目が追ってしまふ。

少女はルセカーに、仕事を徹底指導して行ってしまったが、聞くことを聞いてしまうと物思いの種はつきない。

つまり、ソール・デレフ家はなにものかに脅かおびやされていて、今もそれは続いているのだ。

なんとかしなければと思う。とんでもないところに来てしまったな、とも思ったが、放りだしてゆけるほど、自分は恩知らずではないはずだ。

すくつと、ルセカーは何かを決めて立ち上がった。これ以上考え込んでも埒が明かないので、シースティアに問い質すことに決めたのだ。

と、そういえば、ルセカーは少女の名前を聞き忘れたことも気づいた。

日も暮れる頃、ようやく雑用から解放されたルセカーは、騎士団棟にあるシースティアの仕事部屋へ引き上げる途中だった。

廊下の先で、可笑しそうに笑う女性の声がするので、どこかの貴婦人が騎士を訪ねて来ているのかと思った。

夕日が差す窓辺に人影が二人分。少し赤みを帯びた亜麻色の髪が、夕日を浴びていつそう赤い。

ルセカーは立ち尽くした。

白金の髪を夕日にさらして颯爽と立つ貴公子と談笑をしているのは、何処の貴婦人でもなく、シースティアだった。

明るく笑い、優しげに微笑み、物憂げに口を閉ざす。二人の間で交わされる言葉の端々に浮かべる彼女の表情は、いつもルセカーが見るものとは違っていた。

やがて、娘はいとおしげに青年の胸に手をおいた。それを青年はにぎり返す。

ふと、貴公子がこちらを向いた。シースティアがそれにつられる。「ルセカー」

彼女の唇が自分の名を紡いだとき、鼓動が高鳴るのを彼は感じた。「君の従者かい？」

「はい。ルセカー、仕事は片付いた？」

シースティアは青年に頷くと、ルセカーに訊ねた。二人の仲を隠すように、二人はいつしか握りあつた手を離していた。

「あ、ああ」

何だか、疎外感を感じる。

「そう、じゃあ、馬の用意をしておいて。すぐにいくから」

言葉が喉につつかえて言い付けに返事もできず、ルセカーはただ厩舎へと踵を返すしかなかった。

背中の恋人たちの行為に、腹立たしさを感じながら。くちつけ

ルセカーは黙々と馬を引いた。頭のなかは苛立ったり考え込んだり、その波に合わせて歩調が変わるものだから、引かれる馬が不機嫌に嘶いた。

「ちよつと、ルセカー。もう少しましに歩けないの？ 馬脚が乱れるじゃない」

馬が人間の不規則な足並みに合わせようとするものだから、止まったり動いたり、背中の上で揺すられるお尻が痛い。

「……わかった」

さしもの彼女も、今日のルセカーの頭のなかは読めなかった。

「そこ、右よ」

シースティアが声を掛けた。いつもは通り過ぎる角だ。

「なんでだ？」

ルセカーの顔は仏頂面だ。何のせいかは知らないが不機嫌だ。自

分でもどうしてだか分からないというのも、彼の歳ならまああることだ。

「なんだか知らないけど、そんな顔しないの。今日はご褒美に、いい所へ連れてってあげるから」

ちよつと膨れたルセカーの顔を笑って、彼女は言った。

シースティアは機嫌がよかった。その理由を知っているルセカーが、だから不機嫌なのだと、シースティアは気づかなかった。実をいえばルセカー自身も。

4（後書き）

アルファポリスのWEBコンテンツ大賞（ファンタジー小説大賞）に参加しました。よろしければぜひ投票をお願いいたします。

どこかで見たことのある店の入り口を、騎士と従者の二人連れはくぐった。そこは二人が、主人と従者の関係となる前に出会った酒場であった。

王都へやってきた日以来、従者の身となったルセカーは王都を見物するまもなく伯爵家と王城を行き来するだけの毎日であったから、このての界限へは今日の今日まで足を向けたことがなかった。

「どうでもいいけど、何のご褒美だ？」

「あら、つれない言い方ね。今夜は刺客を撃退した勇者としてもてなそうっていうのに」

ルセカーの額を細い人差し指がつんと押しやる。

「よお、いらっしやい」

店の入り口に二人を見つけた主人が声を掛ける。

「ちよつと、その席、あけてやってくれ」

主人はそう云って、立ち洩る先客をカウンターのむかいの席から二人ほど追っ払って、シースティアとルセカーのための席をつくった。どうやらそこに陣取らなければならないようである。シースティアは苦笑して腰を落着けることにした。

「ふたりとも、いつぞや以来だな。いろいろ噂は聞いているよ」

「こんなことばかりやってると、お客さん来なくなるわよ？」

「構わねえよ、あんたが来てくれりゃあさ。それに奴らだって、ゆるする相手があんたなら文句ねえさ。なあ」

親父は後ろのテーブルに追いやられた常連に振った。シースティアもそちらを振り返る。

「ごめんなさいね」

その一言で常連はたち所に顔を赤くしてしまった。これだから男つてのは。ルセカーは同性の情けなさに、内心で額に手をやっていった。どうもこの顔に騙されているのだ、皆は。自分がされた事をさ

れてみれば分かるだろう。服を一枚残さずひん剥かれて、隅からすみまで床ブラシで擦られたのだ。まさしく隅からすみまで。だがやつぱり喜ぶんだろうなあ、こいつらは。ほとほと美人に弱い男の性を、少年は客観的に痛感した。

その点、ルセカーという少年には免疫があつた。彼の生まれに理由があるのだが、本人が語らぬ事ゆえ伏せておきたい。

「さ、何でも頼んでいいわよ？」

「う、ああ」

と言われても、そらで言える酒の名前なんてたかが知れている。

ルセカーは旅の寒さしのぎで覚えたアルニムという果実酒を頼んだ。栄養価が高く酒精のきつい酒で、旅のそういった持ち物にはもってこいなのである。味も多彩で、渋みから甘味まで造り手の加減に委ねられていて飽きない。好む人の多い酒だが、ルセカーの場合は他に名前が浮かばなかつたせいもあつた。

「じゃ、私はエール酒を」

シースティアもごく一般的なものを迷うことなく注文して、二人は杯を鳴らした。

その後のルセカーといったら、もくもくとつまみの料理に手をだすばかりで何も喋らない。シースティアはそれを、何故だがわからないが、上機嫌で眺めながら杯を傾けている。

「おいおいなんだ？」

主人がかやの外でつまらなさそうに声をかける。

「せっかく面白い話の種が来たと思つたのに、二人して黙つちまつて」

「いえね、ルセカーの食欲を見ると、エレと初めて逢つた時みたいだなんて思つてたの」

シースティアはふつつ、と思ひ出すように笑つた。

「エレがか？」

主人はルセカーの食べっぷりと比べるよつに思い起して意外そう
だ。

「大ぐらいだったのか？」

ルセカーが料理を口に運ぶ合間に口をきく。

「やあね、芯の強いおしとやかな娘だったわ。ただ、その時はとてもお腹を空かせていたの。あなたみたいに、旅をしてここに辿り着いたって言うてたわ。考えてみれば、私の従者は二人とも外から拾ってきたことになるのね」

おしとやか、といわれても頭から鵜呑みにはできなかった。王都でのルセカーの経験では、女とは本来そういった生きものではないように思えるのだ。

「親父さんは知ってるわよね？」

「ああ、礼儀正しい娘だったな」

「あの娘ったら、私を呼ぶときはシースでいいわって言ったら、シース“様”って付けたのよ？ 少し生真面目で、でも明るくて、男の子にしてみれば理想的じゃない？」

シースティアが自分に振るのを聞きながら、ルセカーは他のことを考えていた。エレというルセカーの知らない少女の死に、深く傷ついたであろう彼女が、こうも明るく少女の話題を口にするなんて本当はどんな思いをしているのだろう。蔭の濃い緑の瞳の奥を見つめて、ルセカーはシースティアの心の奥底を覗き見ようと試みた。

「ど、どうしたの？」

声を上擦らせてシースティアは言う。ルセカーの自分を見る瞳は言いようもなかった。少年の大人びた瞳、しかしながらそれはやはり少年のもの。静かな視線に、シースティアはどぎまぎした。

「ふうん、シースでいいのか」

「え？」 とシースティアは眼を丸くした。

「オレ、なんて呼べばいいのかずっと考えてたんだ」

料理の方に向き直って頬張る。

「なんだ、その事ね。ええ、シースでいいわ。でも、やっぱりルセカーね。エレは“様”を付けたのに」

「だって、シースでいいんだろ」

「ふふつ、そうね」

なんだ、とシースは思った。少年の瞳は、ちよつとした物思いの瞳だったのだ。深い意味などない、偶然垣間みえた表情にすぎなかったのだ。

それから二人は、時が経つほどに杯を乾した。酒場は盛り場を装い、主人も二人だけを相手しているわけにもいなくなつて、店内のそこかしこで忙しくしている。

しばらく、また二人は黙つて杯を傾けていた。

「ルセカー？」

そうシースが呼んだとき、周囲の喧騒が、少し遠い騒めきに感じられるくらい時間が過ぎていた。

「ありがとうルセカー」

静かに、シースは感謝の言葉を口にした。ごくんとルセカーは口に含まれていた酒を一息に飲み下してしまった。それくらい彼女の雰囲気は違っていたのだ。

「あなたが居なければ、私はエレの事でいつまでも塞ぎ込んでいたかもしれない。あなたのおかげよ」

そして、リシャール王子のおかげなのだろうな、とルセカーは思った。

「だから、今日はそのお礼。賊を追い返したご褒美でもあるけど」
その言葉には何も返さず、ルセカーは杯の中の水面みなもを見つめていた。

「こないだ酒場に來たのは、酒で紛らわせるため……だったのか？」
今度は、シースが無言だった。

と、ルセカーの肩に重みがかかった。暖かい重みだ。びっくりして身を振ろうとすると、瞳を閉じたシースが、ルセカーの肩に寄り掛かつて穏やかな寝息をたてている。ルセカーは身じろぎをやめて固まった。彼女の赤みを帯びた亜麻色の髪が、さらりと肩にかつてくすぐったい気分だ。

「ほお、ルセカー、坊やのくせに酒が強いな」

そこへ店の主人が戻ってきた。頼みもしないのに酒を注ぎ足す。

「坊やじゃない」と真顔で言い返したつもりだったが、肩のシースが気になって、ちゃんと大人相手に張り合えたか分からない。ルセカーはぐつと杯を呷った。

「そうさな、それだけ飲んで酒に吞まれなきゃ一人前だ」　またまた注ぎ足す。

「それにしてもなあ、おい」

主人の眼はルセカーの肩に向いていた。

「この人を肩に眠らせるのはこの世にただ一人と思つてたよ」

「それつてリシャル王子？」

「おいおい、あまり大きな声で云うものじゃないよ。周知とはいつても、なかなか公にはできない物事だからなあ。それより、お前さんも随分信頼されているようじゃないか。何かあつたのか？　ご褒美とかなんとかいってたけど」

別段隠す事でもないのに、ルセカーは件の暗殺者の侵入の話を手人にしてやった。とはいえ、ルセカーは自分の手柄を誇るような性格でもないから、その話は実に客観的だった。

主人は黙つてそれを聞き遂げると、神妙に口を開いた。

「この人は優しい方だ。エレのことは俺も知つてゐる。良い娘だったさ。だから、あの時のこの人の落ち込み様はそりゃあひどかった。

そんな方だ、お前のご主人さまは。だから、家族同然の家の者を守つたお前のことを、さぞかし心強く思つたに違いねえよ」

主人はそういつて真剣に誉めてくれた。

「お前はいいことをしたんだよ」

また、彼は酒を注ぎ足す。それをまたルセカーは呷った。そういえば、エレの死の真相を聞きそびれてしまったと、ルセカーは思つた。ぼんやりと重みのある肩を見やる。酒精が過ぎたか、少年の頬が赤い。

その日の払いは酒場の主人の奢りだった。

二章 休日と、休息

1

翌日は、出仕する必要のない休日であつた。が、休みといつてもそれはシースのことであつて、ルセカーには使用人たちの手伝いなど探せば仕事はいくらでもある。ただ、早朝からシースに付き合わなくていいことを考えれば、それなりにゆつくりできた。シースも昨晚の酒のせいだ、ずいぶんとのんびりしている様で、午前中はまったく姿を見なかった。

「ルセカー、いい加減起こしてやってくれ。昼食の時間にもなるのにだらしない」

昼食の食卓で、給仕の手伝いを務めるルセカーに伯爵は言った。自分の隣の部屋へ行き、ドアを叩く。予想どおり返事が無いので、しつこくノックしたあと、容赦なく扉を開けた。

やはり、彼女はまだ寝台のなかだ。

「起きろ」

「ルセカー、淑女の部屋に無断で入るなんて失礼よ」

気怠そうな声の抗議がシースの中から洩れだした。ルセカーは無視して踏み入ると、窓を覆うカーテンを勢い良く開いた。と、眩しい陽光が差し込む。シースにはさぞかし強烈な光だろう。さながら吸血鬼のように彼女はうめいた。ただし発する言葉はその限りではないが。

「うう、二日酔い」

「淑女は二日酔いなんてしないと思う」

「意地悪ね」

なんとか身体を起こした彼女だったが、寝呆け眼は相変わらずだった。世に謂う麗しの宮廷騎士の姿とはとても思えない。

「ねえルセカー、私の服は？」

「いつもどおり衣装掛けにある」
セルコーレ

「じゃ、手伝って」

彼女が言うのは着替えのことである。怠そうに立ち上がった彼女の肢体を包むものは、色気も飾り気もない夜着であったが、ルセカーはつい顔を背けた。いつもは動じない彼らしからぬ行為である。いつぞやはこういう少年らしい反応を期待して仕組んだのに、不覚ながら彼女は気づかなかった。

「べ、別に手伝いなんていらないだろ！ 甲冑着込むわけじゃないんだから」

「それもそうか」 とシースは欠伸を噛み殺した。

「じゃあ、オレは先に降りるからな」

ルセカーはシースが服を脱ぎだす前に素早く扉を閉じた。

「シースティア、午後からルセカーを借りるが、構わないかね？」

シースが昼食の席に着いたところで、伯爵はそう切り出した。ルセカーに彼女を呼びにいかせたのは、娘をたしなめるほかにその事を伝える為でもあったようだ。

シースは食事の手を休めると、ちょっとだけ思案顔になった。

給仕の手伝いで、今日は後ろに控えていたルセカーが、親娘の会話に思いがけず自分の名前が出たので、ついつい二人の顔を交互に見やって成り行きを見守った。なにしろ自分のことながら、従者である身には決定権がないので、気になってしょうがない。従者とか召使いとか、そういった境遇で長く働いている人間には当たり前でも、ルセカーは旅の間、いや、生まれて物心ついてからは自分で決めて生きてきたのだ。それが思い通りになろうとなるまいと。今は従者という立場を彼なりに理解して務めているようではあったが。

「ええいいわ、別段用事はないから」

思案顔などしてはみたが、答えたとおり、することがないのは考

えるまでもないことにシースは思い当ったのだった。

「そうか。ではルセカー、聞いているとおりだから、あとで私の部屋にきてくれ」

「わ……はい」

わかった、と口のすぐそこまで出かかるのをなんとか止めて、ルセカーは従者らしく承諾した。

二人の食事のあと、厨房で自分の食事を採ると、手伝いはいらないから早くお館様の所へいきな、という料理人の忠告に従ってルセカーは伯爵の私室に出向いた。

「やあ、よくきたね」

伯爵は机の椅子からルセカーを出迎えた。机の上は使用人に触れさせないらしく、紙片が乱雑に重ねられ、あるいは散らかっている。その内の、ちょうど封をし終えた便箋が、彼の手にあつた。

「君に頼みたいことというのは、この手紙なんだが。これを、ワスマイルという男の所へ届けてほしい。大事なことなので、誰にも一切喋ってはいけない……意味は分かるかな？」

ルセカーは頷いた。が、彼が理解したのは表層的な意味の上であつた。だから、彼はちよつと考えてこう訊いた。

「シースにも？」

と、伯爵ははつきり頷いた。

「シースティアにもだ」

誰にも喋ってはいけない。その言葉を重く捉えるかどうか、また人の感覚によつては、誰にも、という言葉が適用される第三者の範囲が変わる。ちよつとした内緒事をごく親しい人物に問われた時。

また、秘密である、という言葉の意味を軽く受けとめた時。無意識に人は言葉の制止を破る。これは他者の秘密を持たされた人物の価値基準によつて左右される判断だ。この相手になら喋ってもいいか、などと勝手に判断したり、持たされた秘密がその人物の価値観から

みて些細なことか、それとも重大であるかによって、その秘密を保持するか、たやすく喋っても良いかをその人物が勝手に判断してしまふ。その判断は、本当は秘密を与えられた人物がして良いものではない。秘密を与えた人間がするものである。口の軽い人とは、喋っても良いかどうかの判断基準が厳しくない人のことではなく、そうやって勝手に判断する人のことである。こういう人間は悪気もなく秘密を人に喋ってしまう。だって、彼らは自分の価値基準にしたがってちゃんと秘密を守っているのだから。

逆に口の堅い人間とは、この場合ルセカーを指すのだろう。伯爵が、指示を理解したかどうかを確認した意味を考え、少年は伯爵の判断基準を改めて尋ねたのである。

伯爵は満足気に微笑んだ。

「ルセカーに任せれば安心だ。そう、それと護身用に剣を持っていたといい。剣はシースティアに私が許可したからと伝えて一時返してもらいなさい」

伯爵は、ワスマイルという男の居場所と付け足して言った。教えられたのは王都の外にあたる。さほど遠くはない。日没には行つて帰つてくれるだろう。

馬を使うことも許されたルセカーは、さっそく剣帯ベルトを腰に巻いて屋敷を発った。

選んだ馬は、伯爵家の持ち馬のうちの、気性のおとなしい葦毛の牝馬である。

格好も普段の宮廷騎士付きの従者服から、旅をしていた頃の自分の服に着替えた。伯爵から、周囲に身分を悟られぬ様にといい添えられたからだ。

まず、王都は広い。街路の雑踏を抜け、門に達するまでに二時間近くかかる。門を出てからは、馬を飛ばせばすぐだ。

ルセカーは東門をくぐって教えられた場所をめざした。

王都のそばには、カルンという川が流れている。かつては大河と呼ばれ、このサーキス王国の沃土は遙か昔、その大河の底にあった。平野部には大河の名残である川岸が、崖として川の上流と下流に向かつて走っているが、それは現在の川岸から平均で五十キープも離れた場所のことである。かつての河幅がそれほどのものだという証拠だ。

ワスマイルという男は、カルン川から王都に向かって引かれた水路の途上にある水車小屋にいるという話だった。

城門の外は、芽吹いた緑が鮮やかであり、また畑には豊かな土が実りを期待させるかのように黒くふくよかである。

ルセカーの視線は水路を追って道を探した。それらしい道は一本しかなかったのですぐにそれと判る。

時間には余裕がありそうだったので急ぐことはしなかったが、まもなくめざす水車小屋は見えた。逆に早く来すぎたかと心配した。

小屋の外見を一望して、ひと気は感じられなかった。

水車は、刈り入れた穀物を製粉するための動力として使われる。

周囲の畑が土ばかりで黒ければ、水車にも当分出番はないということだ。

小屋の周りに転がる桶や脱穀のための農具は砂埃を被っていて、ひと気のなさは確かだ。

唯一、黒い畑の地平線でぽつんと、農夫が鋤くわを振るっているのが見える。

ルセカーは小屋の戸を慎重に押した。薄板の戸はがたがたと、今にも蝶番ちょうつがいが外れそうな音をたてて開く。

はっ、とルセカーは息を呑んだ。中で溜まっていた空気が、外気に混じって血の臭いを運んだのだ。

次の瞬間、ルセカーは脳裏に何かを閃かせて後ろへ転がった。

直後、元いた場所に、突き出した剣ごと屋根の梁から男が降り下りてきた。野性じみた五感か、あるいは六感か。辛くもルセカーは剣の餌食になることを免れた。

だが、危機はまだ過ぎ去ってはいない。

でんぐり反^{がえ}ったせいで逆さに被^かつてしまった愛用のずたぼろマントを背中の方へ跳ねのけると、すかさず剣を抜く。

こういう事態^{とき}のための帯剣か……！

ルセカーは自分の油断に舌打ちした。生命の危険が無い訳ではない事を予測するべきだった。王都の危険無い暮らしは、そういったものへの心構えを緩めさせてしまっていたらしい。

「誰だ、おまえ！」

ルセカーが素早く誰何する。問答無用で斬り殺されては溜まらない。

男の身形は傭兵か何かだ。少なくとも人間を殺害することに躊躇の無い種類である事は容易く識^しれる。だが、そういった人間とて無差別に人を殺すわけではない。利がなければ不要にそれは行なわない。そして利とは、大抵が金で量られるものだ。それが得られる為の条件がそろった上でなくば、無理を押してまで相手はこちらを殺そうとはしないだろう。

「おまえこそ誰だ、小僧」

男の問いに、ルセカーはしばし沈黙して考えた。少なくとも、男は相手を選んで殺してくれるらしい。

「ルセカー、使いで来た」

「誰の使いだ」

「その前にそっちも名乗れよ」

今度は男が沈黙した。その間、互いの拳動を封じ合うように眼を逸らさない。

「俺はある人物に宛てた手紙を預かってきた。だから、あんたの名前を知りたい」

ルセカーは悩んだ上で藪をつついた。出てきたのは……。

男が動いた。剣を横に滑らせてルセカーの胸を狙う。心臓を掴まれたかの様にルセカーの呼吸が止まった。生死を分ける刹那、殺意の剣を掻い潜る。次の瞬きでルセカーの剣は男の懷に飛び込んでその胸を貫いていた。

詰まった気肺を解きほどこき、呼吸を再開する。息が荒い。

人を殺したのは初めてだ。だが罪の意識は湧いてこなかった。やらなければ自分が殺されていたと、自己正当化することもしなかった。自分の身体能力ならば、男の胸を貫く事は可能だろうと思っていた。しかし、それによってもたらされる結果を考えた上で、それが実行できたかは微妙だ。実行することに躊躇はなかったが、夢中であればこそだった。その結果に罪悪を感じてはいないものの。

「いやあ、お見事だ坊主」

心臓が跳ね上がった。無防備な背中を晒していることに、これほどの恐怖を覚えたことはない。生死の遣り取りにおいて、それがどれほど危険かをたつたいま知ったからだ。

ルセカーは振り向きざまに剣を叩きつけた。それが、何気なくかざされた棒切れに、いとも容易く遮られてしまったことにルセカーは声もなく驚いた。

「落ち着けよ」

低い声の髭面が、刃を受けとめた棒切れ、鋏くわを手にして見下ろしていた。

「俺はワスマイル、ワーズ・ワスマイルだ」

「あ……」

途端に、膝の力が抜けた。がっくりと腰が地に落ちる。

「急ですまんが場所を変えるぞ」

ワーズ・ワスマイルはルセカーの腕を引っ張り上げた。

2（後書き）

携帯からも閲覧可能ですので、よろしかったらどうぞご利用ください。

王都の門を、再びくぐるのには緊張した。普通にしろ、と言うワーズの声も耳には入らなかった。

二人はお互い別々に他人の振りをして官吏の審査を受け、門を通り抜けた。

ルセカーは過度に緊張していたが、もともと農作業にでる農民や、ほんのわずかな時間外に出る人間を細かく取り調べたりはしないものだ。農夫姿のワーズにしても、つい今しがた出掛けた少年にしても、ほとんど素通りだ。唯一の手続きが、外出の割り符である。王都から一日出る者に対しては割り符が与えられる。再び王都に入る際、その割り符を提示すればすんなりと門を通れる様になっている。出し抜く側には出し抜きやすいが、管理する側も日になんども出入りする人間まで審査はしていられない。それでなくとも、遠来する貿易商を含めた旅行者は数が多いのだ。相応の妥協であった。

「おまえ、命懸けのやり合いは初めてか」

ワーズは丸いテーブルの正面に座る少年に訊ねた。

ルセカーは木の器を握り締めてうつむいていた。器の中には聞いたことのない酒が満たされている。

ワーズは彼を酒場に連れてきた。野良仕事帰り目当ての安酒場だ。店のなかには目当てどおりに農夫らしき男たちが埋めている。ワーズもその一人として溶け込んでいるのだろう。だとすればルセカーは少し目立ったが、何も知らない人間が想像力を働かせれば、家を飛び出して騎士をめざした少年が、現実に打ち破られて農夫の父の元へ返ってきた図、とても見えるかもしれない。

「そう暗くなるな。殺らなければ殺られていた」

夢破れたわけではない少年を、ワーズは慰めた。

「べつに、落ち込んでいるわけじゃない。疲れただけだ」

「ならば、俺が敵か味方かも判らないうちに気を抜いて座り込むん

「じゃあない」

急に厳しく叱責するような口調でワーズは言った。低く押し殺した声がルセカーを圧倒した。

「あの時、俺がワスマイルの名を騙る偽物だったら、情けなく腰を抜かしたお前は、あっさり殺されただろう」

無然としてルセカーは器の酒を呷る。勢い良く流れ込んだ液体が喉を灼く。途端にルセカーは咳き込んだ。味は分らない。たぶん不味のだろう。酒精も飲む者に対して頓着なしにきつい。

「がぶ飲みはしない方がいいぞ？ 安酒で純度が低いうえ、酒精だけはきついからな」

ワーズは態度をがらりと変えて、楽しそうに忠告した。ルセカーの眼がいつそう不機嫌になったので、彼は本題に進むことにした。

「まず、お前さんを危険な目に遭わせたことについては、伯爵の分も合わせて謝っておく。あの男が水車小屋に居座っちまってなあ。俺が留守の間に、知らずにやってきた連絡役がやられちゃった」

連絡役とは、小屋で最初にルセカーが見た男の死体のことだろう。ではこの男は？ ワーズ・ワスマイルという男は何者なのだろう。

伯爵との関係は？
ルセカーは疑問を抱かずにはいれなかった。伯爵という身分の人間が関わるには、少々胡散臭い人物だ、この男は。本物の農夫では、まかり間違ってもないはずだ。伯爵は裏でこんな人間と通じて、いったい何をやっているのだ。

「……あんだ、何者だ？」
ルセカーは従者の分を忘れて訊いていた。もともと、従者の身をわきまえていた訳でもない。

「ふふん、気になるか？」
ルセカーが頷くのを見たりとにやける。

「ひみつだ、少年。従者は従者らしく伯爵の手紙を渡してくれればいいんだ」

ルセカーはしかめっ面して懷から伯爵の封書を引っ張り出した。

ワーズが伸ばす手から、ぴつと封書を引っ込める。

「教えないと渡さない」

今度はワーズが眉間にしわを寄せる番だ。

「おまえな、伯爵に怒られるぞ」

「恐くない」

「クビになつて追い出されるぞ」

「……この際、別にいい。旅は慣れてる」

「じゃあ奥の手だ。ここの飲み代は払つてやらん」

ぐつとルセカーは言葉に詰まった。なんで分かつたんだろうか、今のルセカーは文無しだ。給金はここにきて未だ貰っていない。安酒の飲み代だつて払えるものか。

「まあ、伯爵に怒られるどころか、ここで首根っ子押さえられてタダ働きだな」

カマは掛けてみるものだ。ワーズは勝ち誇った。その笑みが悔しくてルセカーは自棄になった。

「かまうもんか。旅の途中で代金代わりに働いてたこともある」

「まあムキになるな。おいおい教えてやらん事もない」

なんだか分が悪くてルセカーは勝負を投げた。

ワーズに手紙を渡して杯を乾すと席を立つ。

「待て待て。返事が必要かもしれندらうが」

ワーズは開封して紙面に目を通しながら、ルセカーの肩を押さえて座らせた。仕方なく、浮かせた腰をもう一度落ち着ける。

しばらく黙つて紙面の文字を追っていたワーズが口を開いた。

「お前、ルセカーという名前なのか」

「なんで……」

「ここに書いてある」

「見せる」ルセカーが横合いに飛び付いて手紙をひったくった。

「見たつてお前……」

「馬鹿にするな、字くらい読める。ちよつとだけど……」

王都にくるまでは読めなかった文字だが、シースが仕事の一貫と

して読み書きの手解きを始めてからは、とっかかりが出来たくらいには文字を覚えていた。だから名前くらいは読めるが、文章の読解はちよつとした暗号の読解作業に近かった。かつては未知の記号だったのだから、大した進歩ではあるが。

「……………セカー、ほんとだ、書いてある」

「ほれ、もういいだろが」

再びワーズが手紙をひつたくる。胸の内で彼は安堵の吐息をついた。おいそれと見せてよい中身ではないのだ。

「ちよつとお前の剣を見せてみる」

「今度は何だよ。剣の事も書いてあるのか」

「いいから見せろ」

ルセカーは訳が分からず渋々さし出す。その剣が目に入った途端、ワーズは顔色を変えた。手にとつて確かめ、ますます深刻な顔になる。

「おまえ、この剣をどこで手に入れた」

感情を押し殺した声だったが、その眼がルセカーは氣にくわなかった。この剣が盗品だと疑っているのだ。あの宮廷騎士ガブレイが疑つたように。

ワーズ自身は義を持つ人間だった。だが、どうしてもその疑念は隠しきれなかった。彼の眼はルセカーという少年を、盗みを働くような人間でないと判断している。しかし、剣の本来の持ち主をワーズは知っていた。だからだ、ワーズの沸き上る疑念は。

“彼”が死ぬはずが無い。ならばこの剣は盗品なのか？　しかし“彼”は盗まれるような失敗はしない。ではやはり彼は死んだのか？　お前はなぜあいつと同じ名前を持っている？　ロークアークの騎士ルセカーと同じ名を。

「オレは盗んでなんかいない」

「そんなこたあ分かつてる」

「分かつてないじゃないか。あんた、疑つてる」

指摘されてワーズは認めた。そんなつもりはなかった。確たる証

拠もなしに疑ってしまっていたことにワーズは気づいた。この目の前の少年は、自分が抱いている疑惑を嫌悪し、そして疑われることに哀しみを抱いているのだ。

ワーズは自分の眼にも自信があったが、少年にも等しく、或いはそれ以上に人を見抜く力が備わっているのを悟り、ワーズは口を一度噤んでうつむくと謝罪の言葉を振り絞った。

「……そうだ、疑っている。すまん」

その声はひどく辛そうで、ルセカーはそれ以上強く言えなかった。「俺はその剣の持ち主を知っている。そしてそいつは剣をみすみす盗まれるような奴じゃない。まして、死ぬような奴じゃない。なのに何故、お前はあいつの剣を持っている？ 教えてくれルセカー！

俺の友と同じ名を持つ少年……あいつは、どうした？」

ワーズは真剣だった。茶化すような口振りも、おどけた表情もない。目のまえの男は、かつて少年が出逢ったルセカーという青年のことを本気で案じているのだ。

「それは……」

それは、一年前の雨の日だった……。

旅に出てから一年くらいのことだ。彼、ルセカーに出逢ったのは、旅に出て一年、なんとか生き延びていた。ただ生き延びるだけ、なんの目的もない。

いま少年が歩くのは、ルセカーが示した道標の向く先だ。

それまでは、あてのない旅だった。故郷を逃げ出した少年には、生きる以外の目的が持てなかったのだ。

その頃、少年は森林地帯を東へ向かっていた。広大な大森林は、地図のなかの一地方を埋め尽くしている。深く踏み入れれば樹海に等しい場所だった。ただ、神々が住まうと謂われる聖原の彼方へ至る世界の果ての山、その麓に広がる真の樹海とは、人の足跡たる街道があるという一点で、おおいに異なっていた。

少年は走った。先刻から怪しくなった雲行きが重たい雨粒を落とすまで、思うほど間がなかった。雨水はあつという間に足元の土をぬかるみに変え、革靴を汚しはじめる。時々、ぬかるみに足を取られて危うく転びかけながら、枝の張り出した大木を見つけると、こと決めて少年は木陰に飛び込んだ。

「……………ほんとに、これが街道だっていうのか」

肩で息をしながら、彼は独り言と分かって呟いた。吐息が、湿気を帯びた空気の中で、飽和して唇を濡らしている。

木の幹を背にすがって、少年は来た道を眼で辿った。自分の足あとが点々と、泥に濁った小さな水溜まりに変わっている。

「人知れぬ街道さ」

独白であるはずだった少年のそれに、応えがあった。雨音に入り交じった言葉は、静かに悟ったかのような口調であった。声の出所を探って、少年が背をもたれた木の裏に回ると、一人の男が同じ幹の根元に座していた。

「この年になってこの道に入ったのは、我々がせいぜい三、四人目

だろうな」

少年が問い掛けの言葉を定められぬ内に、男は継いで言った。落ち着いた口調は、深い人格を宿した高齢者を先入観として与えたが、そうではなかった。薄い茶色の髪をもつ男の顔は旅の汚れに塗れているものの若々しく、伸びてしまった不精髭を剃り落とせば優れた顔立ちであるに違いない。ただ、死者にも劣らないほど彼の顔面は蒼白であつた。

「怪我、してるのか」

少年は彼の左太股に突き立つ異物を見て取った。そこには鉄芯の矢が深々と矢尻を埋めていた。少年が手当てを試みてそれを引き抜こうとすると、彼は先程までの口調と打って変わって鋭く制止した。少年がびくつと手を止めたのを確認して、彼は嘆息する。まるで声を上げることと相当の労力を要したかのように。それから彼は再び穏やかな口調に戻つて言った。

「触らぬがいい。毒が塗つてある」

彼の太股に刺さっているのは普通の矢ではなかった。その矢は矢尻のみならず全体に刃

を施され、掠めただけでも毒殺が可能な暗殺に用いる類の武器だつた。矢尻は鉤状になり、全体が刃であることも相俟^{あいま}つて、引き抜いて治療することを困難にさせる、残虐性の高い武器なのである。そして彼を死に至らしめる原因となる毒を防ぐ手立ては、今ここにはなかった。深く突き刺さつた矢が、あらゆる応急処置の可能性を阻んだのだ。

「お前の気持ちはありがたいが、もう手遅れだ。いつそ、足を切り落とそうとも思ったが、足の付け根から斬るのでは、死ぬ原因が変わるだけなのでな」

たった一人、しかも傷を負つた本人だけでそれが可能として、ここでそんなことをすれば出血によって死に至る。唯事でない事実を冗談のように口にした彼は、一人でくつくつと笑った。

「しかし、お前、なんという眼をしているのだ」

彼は首だけを動かし少年を見つめた。もはや自分の死を悟った彼の眼は少年の心を見抜いているか様であった。

「お前の澄んだ瞳は無垢なようできて違う。獣のようだな、ただ生きてるだけだ。池の底を突けば池の水は激む。流れていても澄んでいる清流とは違う。お前の瞳は何事かを為せば濁るかもしれないしかし、或いは清流かもしれない」

死を目前にした男の言葉に、少年は耳を傾け続けた。それが礼儀かもしれないと思ったからだろうか。ただ、少年は彼の言葉から逃れられないような気がした。

「どうした。何もお前は生きる標しるしを持たないのか？」

問い掛けた後で、彼は続きをやめ首を振った。

「すまんな少年。意識が混濁してきて変なことを俺は口走っているようだ」

「いや」 気にしていない、という意を少年は短く示した。「あんたの言うとおり、おれには何もない。故郷から逃げ出して、意味もなく生きてる」

故郷、その呼び名があそこに相應しいかは解らないが、生まれ育った場所には違いない。

「そうか……少年、お前の名は？」

「ロジー」

「ではロジー、お前に生きる標を与えてやろう。俺の名を継げ。我が名ルセカーを継いで騎士となれ。そうすればちよつとは面白い人生が送れるかもしれん」

「ルセカー……ロークアークの？」

その名が放つ栄光は少年も知っていた。同い年の子供には憧れの存在だったが、少年には自分の境遇とその栄光が、夢に見る以上に遠くかけ離れたものだと思っていた。だから、彼はそういった憧憬からは背を向けていた。今、伝説の人物を目のあたりにして見れば、背にしていた心はやはり眩しいほどの憧れだったのかもしれない。

「知っていたか……俺も有名になったものだ」

「なんで、会ったばかりのおれなんか……」

「悪あがきさ。俺の名を聞いて震え上がる奴が結構いるものでね。なあに、これだけ歳が違えば生命を狙われる心配もないさ」

彼はそういうと眼を閉じた。毒の苦しみは無いのか、彼の呼吸は穏やかであった。

「もうすぐ俺は死ぬ。答えはその後でもいい。決めたら俺の剣を持つていけ。それが証になる……」

……最期に、お前に遇えた偶然を感謝しているよ」

静かな呼吸は次第に聞き取れなくなり、少年の耳には雨音が広がっていった。

樹林の葉を打つ雨音だけが、その時そこにあるすべてだった。

雄弁ではなかったが、新しきルセカーはワーズに彼の最期を語った。ワーズは感情を隠してしまつたが、胸のうちは容易く悟れる。彼はルセカーに、伯爵へ連絡を待つようと伝言を言付けて席を立つた。

酒場を出ると、すっかり日は晩くれていた。雲が流れているのか、空に星はない。手綱を引いてとぼとぼと歩くルセカーに、石畳を叩く蹄の音だけが聞こえた。煩わしくて、馬の背に跨がるより、そうやって歩きたい気分だつた。

哀しい。人の哀しい心に触れて、自分も哀しい。

ふと少年は、騎士に出逢つたことの意味を考える。彼がたとえ気紛れにでも引き継がせたその名と、それが与える何か。古きルセカーが新しきルセカーの辿る道筋に与えた標は、大きく彼の運命を揺さ振っている。今はそう見えなくとも、いつかその影響の大きさに気づくだろう。少年が、たとえ今、気紛れで騎士ルセカーを目指していたとしても。

半ば放心していたのだろう。どこをどう歩いたか覚えが無かつた。ふと我に返つたルセカーは、自分が王都の道筋に疎いことを確認した。どこにも見覚えのある景色がない。サーキスの王都に来てから歩いたところは狭い範囲に限られる。従者生活が始まってからも、屋敷と王城の往復がほとんどで、行動範囲は狭くなるばかりだ。景色に記憶がなければ、残るは方向感覚だけが頼りだが、無意識に暗闇を歩いてしまったせいで、はつきりとは向かうべき進路が見いだせなくなっていた。まあ、旅の途中で迷うような野垂れ死にの恐怖はない。呼べば人の居る街のなかなのだから。屋敷へも、王城まで歩けば時間は掛かるが帰れるだろう。旅の危険を考えれば、人が造り上げた空間は安全を保障された快適な場所であつた。そのはずであつた。

迷い足の行く先を決めて一步踏み出したその時だった。死の危険が風鳴りをたててルセカーの耳元の空気を突き破った。背後から突き抜けたそれは、遙か先の石畳に火花を咲かせて滑り落ちた。一瞬、ぎよつとして硬直する。ルセカーは、自分が今あまりにも無防備な状態で死の危機をやり過ぎたか知ったのだ。わずか一步、わずかだが、それによる移動分がルセカーの身を死の領域から脱しさせてくれた。そのときルセカーが頼ったのは、ただ運のみ。幸運という御し得ない事象が、彼を狙った矢から彼を救ったのだった。

一瞬の硬直から立直ってルセカーは振り返る。だが、背後の街並に射手の姿は見取れない。おそらく、弩による遠距離射撃だ。ルセカーは手綱を引いて走った。なるべく馬を背にする位置で射線を避ける。射手の正確な位置が掴めない状況で、効果の程は疑問だが、そうして逃げるより他なかった。

周囲に目を配ってみる。ひと気は無く助けの当てはない。どのみちルセカーには大声を出して助けを呼ぶ、という発想が欠けていた。長らく一人旅で、人に頼ることをしなかったせいだ。それは立派に聞こえるが、この場合は助かる可能性の何割かを捨て去る愚でしかなかった。誰に頼れというのだ。彼は反論するかもしれないが、たとえば大声のひとつも出せば、人目に付くのを避けて射手は逃れるかもしれない。

狩人が狙う獲物のようにルセカーは逃げ、おそらく背後から獲物を狙う狩人のように、刺客は迫っていた。

獲物を追い詰める第二射が風音をたてる。矢がルセカーの二の腕を掠めて過ぎ去った。皮膚と表面の肉がすっぱりと裂けて、神経に熱い痛みを走らせる。それを堪えて街路の角を曲がると、ルセカーは馬に飛び乗って腹を蹴った。乗り手の意を汲んで、猛然と栗毛は駆けだした。曲がった角が背後に遠くなっていくのを確認して、ルセカーが安堵の息を吐いたのも束の間、その角を、石畳を叩く馬蹄が追いついた。

ルセカーは冷汗が吹き出るのを感じた。射線に背中を晒している

のだ。

追っ手の方は苛立っているに違いなかった。必殺を機した一射目を偶然によって阻まれ、二射は小賢しくも馬体に遮られてままたらなかつた。追っ手が三射目を放つ。薄暗い景色が風音とともに後ろへ轟々と流れるなか、弩の矢だけが景色の奔流を逆流して迫ってくる。が、馬上からの狙いは幸いにもルセカーの頭上に逸れた。後ろ髪が逆立つ。ルセカーは肩越しに振り返った。刺客が剣を抜き放つのが目に入る。矢が尽きたようであつた。もともと弩は強力な威力の代償として、矢を番えるのに労力を要する。その為、連射はできないのだ。この刺客は弦を三段に張った三連射の特殊なものを使つたに違いない。ルセカーにはそこまで気を回す余裕はなかつたが。

射手は矢が尽きたにもかかわらず、追走をやめなかつた。馬足は互角で、差は縮まる事はなかつたが、広がりもしなかつた。こうなると、先に馬が根を挙げた方の負けである。生命を狙われる側としては、より確実に安全圏へ逃れる方策を模索する必要があつた。

大きな街路へ出る、その角をもう一度曲がり、更にもう一度。ルセカーはそこで馬上から物陰へ飛び降りた。石畳に叩きつけられ転がりながら、素早く身を隠して気配を殺す。

数秒後、ルセカーが身を潜めた軒下の樽の前を追っ手が行き過ぎた。馬脚を緩めなかつたところを見ると、どうやら気づかれずに済んだようであつた。ルセカーの乗馬は、すぐ先の繁華街に飛び出し、ちよつとした騒ぎを巻き起こしていたが、乗り手の方は関知し得ざる出来事だつた。

ルセカーは左胸のなかで暴れる心臓と、荒くなる呼吸を抑えて息を潜めた。

追跡者が舞い戻ってくる気配はない。

ルセカーは息を殺したまま、その場を立つた。

と、壁に手を突いた腕に熱痛が走つた。矢が掠めた切傷だ。ルセカーは傷口をおさえ、かつてのルセカーの死因に思い当つてぞつとした。

（毒………！？）

傷自体は深くない。だが、毒ならば、それは関係ない。ルセカーは傷口から血を吸いだして吐き出した。

足元がふらつく。気が抜けたのか、それとも、やはり矢に毒が塗られていたのか。

ルセカーは暗がりへと逃げた。どこか安全なところへ。闇に身を隠す獣のように。

路地裏から路地裏へ。どこをどう辿ったのか。朦朧として意識と記憶が飛ぶ。

光のあたる場所が、ルセカーの目に眩しく映った。路地裏の隙間から見える暖かい場所。人がいる。いて欲しい。家族、友人、恋人、呼び名はなんでもいい。待っている人が。

光のあたる場所。そこへ還りたい一心で、少年は力を振り絞って歩いた。

三章 望郷と、焦燥

1

故郷、その呼び名があそこに相応しいかは解らないが、生まれ育った場所には違いない。

少年は、その小さな町の娼館で育った。その町は小さいが、周辺には開拓者たちの村落が点在し、近郊には太守の住まう大きな街もあった。多少の距離が、忍んで足を運ぶ種類の客に好まれて、また美しい女たちを多く抱える店との評判が、街の男たちを誘った。

少年は孤児だった。いや、本当はそうでないかもしれない。娼館の女主人はそうと言わなかったが、娼館の女たちのなかに、少年の母親がいることは暗に知れた。

娼館で、少年の居場所といえば、屋根裏の自分の部屋だった。その上に立つと天井に頭をぶつける寝台。壁の真ん中にある、大きさだけが自慢の窓。低い天井は、成長期になると窮屈な感じがした。

夜、それは女たちの仕事の時間。その間、少年は階下に降りることを禁じられる。幼な子ならともかく、寝入るには早すぎて退屈な時間。窓辺にしゃがんで、月明かりの景色をぼんやりと眺めるか、それともこっそり抜け出して夜の散策に出掛けるか。夜の過ごし方は、どちらかに決まっていた。

「ロジー、そんなところでうたた寝したら風邪ひくよ?」

その日は窓辺にいた。月がとても明るくて、外がはつきりと見える。波打つ丘陵、地平の彼方の小さな山影。群れからはぐれた小さな雲が、青白く照らされて無音に漂っている。でも、何時間も見ているには、やっぱり退屈な景色だった。

うわごとを呟いて、うつつへと舞い戻ると、ロジーは口からこぼれた液体を拭った。

「トリス?」

少年は、夢とうつつの狭間から彼を引き戻した声の主を振り返った。彼女は、下の階から梯子を昇って腰から上を覗かせていた。床から突き出た梯子の先に腕を掛けて、くすくすとした笑みを浮かべている。茶色の髪を結い上げて大人びた印象を作っているが、年の頃はまだ十六、七の娘だ。

「よだれ、白くなってるみたいよ？」

寝呆け眼を擦ったロジューは、今度は頬ほおを撫で付けた。

トリスは屋根裏へ昇りきると、ロジューに近付いて少年の頬の汚れを確かめた。彼女の手がロジューの頬を包んで見つめている。もう片方の手は、ハンカチでいささか遠慮なく彼のほつぺたを擦りつけていた。

吐息が肌に感じられるくらい、彼女の顔が近い。眼を逸らすと、肩の広く開いたドレスの胸元が眼に飛び込む。顔をそっぽ向かせないかぎり、少年の視界は彼女で一杯だった。

ロジューは少し顔を赤くして顔を引いた。

トリスが顔を曇らせる。

「ごめん、私、香水くさいね」

仕事の時は、化粧も厚いし香水もたつぷり振りまく。そんな色香に騙される馬鹿な男が商売の相手なのだ。

ロジューが顔を引いた訳を誤解した彼女は、そういつて謝った。

「トリスはトリスだよ！」

大きな声の主張に、トリスは眼を丸くした。そのあと、色香を放つ化粧と衣装に不似合いなほど無邪気な笑顔を花咲かせた。

「ありがと。じゃ、私は仕事に戻るから、もうお寝みなさい」

彼女が去った部屋は、まるで灯りが消えたようだった。彼女という音楽が鳴りやんだ様だった。

本当は仕事になんて戻らせなくなかった。トリスの腕をつかまえて引き止めたかった。でもそんな資格も力もなかった。彼女たちの力で、ロジューは養われてきたのだ。そして、こうしなければ生きていけなかった彼女たちだ。

一度だけ、トリスの仕事を窓の外から覗き見た事がある。

相手は、人目を忍んでやってきた高い身分の男だった。

脂ぎった顔が厭らしい笑みを浮かべて、トリスの白い肌を撫でまわす。トリスがそれを拒絶する事無く受け入れて喘ぐ様を、ロジーは目のあたりにした。

叫びだしたくて、それを我慢すると喉を掻きむしりそうになった。そして、醜い贅肉をかぶった男の身体に抱きかかえられたトリスの瞳と、目が合った。驚きに見開かれる彼女の瞳。自分がどんな顔をしたか分からなかった。ロジーは、その場から逃げ出していた。

「あのブ男がどれだけの金持ちってことなんだからね。どんなにデブでも、肥えられるだけの金持ちってことなんだからね。なにがあつたか知らないけど、こんなことは一度にしておくれよ、トリス」

戸口から、灯りとともに女将のラチカの声が洩れだしていた。夜中の町を、とぼとぼと歩き回って帰りついた時だった。扉の陰で、館の女たちが中の様子を窺っていた。

「どうしたの？」

「トリスが、お客の相手をしている最中に、急に嫌だつて騒ぎだしたらしくてねえ。ラチカがおかんむりなのよ」

女の一人がロジーにそう教えた。

「ちよつとあんた！ 子供に余計なこと言わないの！」

年長の娼婦がその女を叱った。

彼女が叱るのは、十三になったロジーなら分かることだった。

話を終えてトリスがこちらへ向かってくると、女たちは蜘蛛の子を散らすように部屋へ戻った。ロジーだけが、そこにとり残された。何か言わなくては、そう思ったのに、沈んだトリスの瞳に自分の姿が映ったとき、ロジーは居たたまれなくなつて自分の部屋へ階段を駆け上がった。

背中のトリスは何も言わなかった。けれど、哀しげな瞳が自分の背を追っているようで。

暗い部屋に、ロジーは閉じこもった。朝になつても、下に降りず

に朝食も採らなかつた。その日の朝食はアンナの番で、彼女が呼びにきたけれども、ロジ―は出入口の床板を開けなかつた。一度呼びにきただけで、あとは誰もこない。女将がそうさせているのだろう。「食欲がないなんて贅沢者に、喰わせる飯はないよ」それが彼女の口癖だ。

別にいい。誰の顔も見たくない。いや、来て欲しかった。少年のほんとうの心は、そう言っていた。トリスと話がしたかった。

こんなとき、トリスはかならず来てくれる。でも、今度は来てくれるだろうか。傷ついたのは、少年よりきつと少女の方だ。

それでも、やっぱり彼女は来てくれた。

「ロジ―？」

床板を小さく叩いて掛ける呼び声は、意外なほどに明るく、そしてこれからいたずらを始める子供のようにこつそりと、少年を呼んだ。

「開いてるよ」 そう返事を返した。もともと鍵なんてないし、その代わりにのせておいた重しも、自分が馬鹿馬鹿しくなって片付けておいた。トリスがきつとくるから、そう思った自分の甘えもまた、恥ずかしかったが。

ことんと戸が開いて、トリスが顔を覗かせた。

「ロジ―、お腹すいたでしょう。お昼をこつそりお弁当にしたから、外に出掛けて一緒に食べましょう？」

承諾の返事が喉につかえて、代わりにこくりとロジ―は頷いた。

外はいい天気で、屋根裏部屋に立て籠もるのはもつたいない日だ。「どこにしようか？ そうだ、川べりに行こう？ 眺めもいいし、きつと気持ちいいわ」

トリスの明るさに引っぱられて川べりに向かって歩くと、やがて彼女の言うとおりの景色が広がった。

野っぱらに、石ころが転がった小川。彼方の山並みはいつもよりはつきりとした輪郭で、遠くの森では鹿がこちらを覗いていそうだ。あの森へ踏みいると彼方に見える山へと至る。それを越えたら、

どんな国だろう。どんな土地があつて、どんな人たちがどんな生活を送っているのだろう。

ロジの胸は思いを馳せ、想像の中でそれは現実となり胸を熱くした。でもその現実には胸の内だけの現実で、だから達成されたのは満たされて熱くなつた胸だけだ。それもすぐ空虚に変わる。

あの森へ踏みいり、彼方の山を越えれば、彼女は自由になれるだろうか。

「ロジ、どうしたの？」

トリスが驚いたように駆け寄ってきた。

目に熱いものが溢れて頬を濡らしているのは判っていた。

胸が熱い。満たされているからじゃなくて、満たされない思いが悔しいと叫び声をあげているから。満たされないものを満たすことが、自分には叶わないことを知っているから。諦めとは違う。望みに対して、自分のあまりの無力さが、ただ悔しい。

自分の力で叶えられないことを彼女にぶつけるのはただの我が儘だと知っているから、それは言えない。

「……………オレ、トリスのこと好きだ」

そう言うだけ。それが精一杯だ。

トリスの顔が曇った。少年の言葉が嫌だからじゃない。

ロジは我慢強い子だ。この少年が涙するのに、どれほどの強い思いがあるだろう。

一言だけ言つて、あとは歯を食いしばつて前を見つめる瞳。その言葉に、どれほどの思いが込められているのだろうか。

「男の子って、素敵ね」

ふっと、彼女が顔を寄せて、その唇がロジのに重なる。

「ありがとう、私を好きでいてくれて」

「でも、私はあなたに嫌なところばかり見せちゃう。こんな生き方をしていれば自業自得。仕方ないよね……………」

三章 望郷と、焦燥（後書き）

最近、コメントを頂くことが増えました。皆さんありがとうございます。
今後もがんばります。

トリスとの別れは、知らぬうちに忍び寄っていた。

それは夏の近いあの日。

彼女に目をかけた高貴な身分の人物が、彼女を愛妾に迎えたいと使者を寄越したのだ。

使者は前金を持参し、後日その三倍の額を支払うという主人の意向を伝えた。

いわゆる身請け、体裁はどうあれ彼女は売られるのだ。

話を聞いたロジ―は震えていた。娼館にとつても、トリスにとつても悪い話ではない。そして決定は女将の意思次第で、彼女がそうと決めればトリスの意思も、ましてやロジ―

の口など挟む余地もないのである。彼女は行ってしまう。どうしようもなく、それは決まったことなのであった。

その夜、トリスの部屋の戸をロジ―は叩いた。

夜更けの来訪を告げられたトリスは、そつと扉を開いた。来訪者がロジ―であることは察しがついていたようだ。

「ロジ―、お入りなさい」

立ち尽くして何も告げないロジ―を、彼女は部屋に招き入れた。

トリスはロジ―をベッドに座らせ、自分はテーブルに腰をすがらせて少年を見つめた。

彼女は何かを言おうとして口を開き、それを言葉にするのを試みて、はにかむと首を振って諦めた。

無言の間を先に破つたのはロジ―だった。

「……………行くのか？」

「ロジ―、一緒に逃げよう、どこか遠くへ行つて暮らしましょう。」

二人なら、苦勞してもどうにでもやっていける」

ルセカーは、そこで違和感を覚えはじめた。彼女はそんなことは言わなかった。これは自分が望んだ夢なのだ、と。

夢のなかの彼女は、自分を掻き抱いて、耳元に何ごとかを呟いた。それは愛の囁きだったような気がしたけれども、やはり夢だ。何も思い出せない。

「……トリス」

熱にうなされたルセカーの額の汗を、シースティアはそつと拭った。

「シースティア様、どうですか？ 様子は」

水差しを手にした少女が、ランプの灯りだけの薄暗い部屋に入ってきた。かつてのシースティアの従者エレの友人だ。名前はルーヤという。ルセカーを怒鳴りつけたあの少女だ。

シースティアは、彼女のことを記憶していた。女性騎士として、女の騎士見習い従者のことはだいたい耳に入ってくる。なにより彼女はエレの友達としての面識もあった。

「まだなんとも。うなされているみたい」

静かにシースは言った。

「毒を使うなんて、卑怯だ」

ルーヤはシースの横に腰掛けると、祈るように手を組んだ。

「そう……そうね」

生きるか死ぬか、それを突き詰めていけば、どんな手段も忌避することのない非情さを知る剣士としてのシースが、今はルーヤの言葉に頷いて、彼女の肩を抱いた。

二人の胸には、共通の人物の死が影を落としていた。

騎士団は王城の外にも施設を幾つか持っている。ルーヤが住む女子従者寄宿舎もそのひとつで、民間から借り受けた四階建ての建物に、騎士団に所属する女子従者のほぼ全員が寄宿していた。

騎士たちは、ある一線では男女の別には頓着しない。戦場であれば当然のごとく無視される事柄であるからだ。一方で、平時の女子たちは、女らしくあることを、女社会の団結と暗黙の規律を互いに

肌で感じることで、或いは無礼な男どもに感じさせることで守っていたが、寄宿舎が外部にあることについては、単に騎士団の敷地が足りなくなったという一点が、その理由であった。

「ルーヤ」

夜更け。戸締まりの見回りに歩いていたルーヤを、暗がりから誰かが呼び止めた。

「あの男の子の具合、どう？」

手に持つカンテラの灯りを差し向けると、ルーヤと同年代の少女たちが階段のなかほどから彼女を見下ろしていた。

買い出しに市へ出掛けたルーヤが、傷を負って倒れた少年を運び込んで、寄宿舎はちよつとした騒ぎになった。

ルーヤは野次馬と人手の区別をつけ、借りるべき手はきちんと借りて、彼女ら同僚たちには引きとってもらったが、彼女らにしても気になるのは理解できることだ。

「今、シースティア様が看てらっしゃるわ。熱がひどくて、わからない」

「そう……」

「さ、早く部屋に帰んなさい。風邪ひくわよ」

夜着に肩掛けという彼女らの薄着をルーヤは見咎めた。

「う、うん」

彼女らが階段を振り返って昇りはじめの確認してから、ルーヤがその場を立ち去ろうとしたその時だ。今し方、鍵を閉めたばかりの玄関の扉の外で、銅製のノッカーが鳴った。

夜は深まり、その闇は深淵に差し掛る時分。

ルーヤは扉を凝視して硬直した。

静寂が不気味さを漂わせて、ルーヤの胸中に刃をあてられたような圧迫感を与えた。

やがて、無機的なノックがもういちど扉を鳴らす。

ルーヤは懐剣を確かめると、戸口にカンテラを掛け、後ろ手に抜き身の懐剣を隠して扉の鍵を開ける。ルーヤは息を飲んで戸を開い

た。

「夜分失礼するよ。君はルーヤ、だったね」

細く開いた扉から、優しい細面が覗いた。

「ソール・デレフ伯爵閣下！」

白が混じりの茶色の髪は、少し乱れていた。馬を飛ばしてやってきたのだろう。

「話は聞いた。ルセカーを救ってくれてありがとう、ルーヤ」

ルーヤは恐縮した。エレを訪ねて伯爵家に一度行ったきりの、従者ごときの名前を覚えていて、それどころか頭まで下げられたのだ。どれほどエレという少女が大事にされていたかが分かる。

「閣下、礼などおっしゃられるには及びません。それにまだ容体は………」

そこでルーヤは、はっと手にした懐剣に気づいて、慌てて鞘に収めた。

「気を張り詰めていたようだね。周囲を私の配下の騎士が守っているから、少し気を緩めて休みなさい」

「はい……でもシースティア様が……」

「娘には私から休むように言っておく。さあ」

「では、部屋にご案内してから、少しだけ休ませて頂きます」

いつのまにか、眠ってしまったようだった。意識が覚醒すると、目を離している隙に悪いことが起こったのではないか、そんな嫌な想像に駆られて恐くなる。そんなときは、まだ熱で苦しそうだけれども、乱れた呼吸でさえ安心させてくれる。

シースは、ルセカーの額にあてられた布を桶の水でしぼり直した。様子はどうだね」

その声に、シースは驚いたように振り向いたが、しかしその驚きはすぐに些末事として彼女の心からしぼんで消えた。

シースは訪れた父親に首を横に振った。

「医者はなんと？」

「……運が良ければ見込みはあるとだけ」

「そうか」

「でも！ あの娘の時もそうだった、医者はやっぱり運が良ければ助かると。でも結局、薬は効かなかった！」

「シースティア……」

伯爵は我が子を抱き締めた。

夜半に降りだした雨は、王都の街並を静寂で塗り込めた。闇と驟雨に閉ざされた街には、何かよからぬものが徘徊している様で不気味だった。

「こんなときに嫌な雨……」

自室の窓辺に立つルーヤは、室温によらぬ寒気を感じて肩掛けを引き寄せた。
ショール

灯を落とした部屋は暗く、外の闇と室内の闇に挟まれた壁だけが、彼女が手をついた壁だけが、自分の拠り所であるように彼女には感じられた。

ルーヤが目にする窓硝子は雨水に淀んで歪んでいて、ところどころにどこかの家屋の窓から漏れる灯りだけが目に写った。

敬愛するシースティアに任せ切りで、眠れる筈もなかった。

会っていきなり口喧嘩した少年だけど、助かると良い。ルーヤはそう思っていた。もう、あんな思いはたくさんだ。

その時、見るとはなしに見ていた窓の外を、ふっと何かが横切ったような気がした。

ルーヤは目を疑った。確かにいま、黒塗りの景色にぽつりぽつりとある灯りの点を、何かが遮ったのだ。しかし、ここは四階だ。一体何が横切るといふのだ。ルーヤは息を飲んで窓の外を凝視したが、目に見える変化はない。ルーヤは窓を開けて確かめようか、迷った。窓の掛け金に、おそろおそろ手が伸びる。

「……………」

ルーヤは伸ばした手を、しかし途中で降ろして窓を開けるのをやめた。たぶん、気のせいだ。

用心深い彼女が、この時はなぜかそう思った。いや、そう思おうとした。それは彼女の本能の為せるわざなのか。この時、それは彼女にとって幸運だった。

少し風が出てきた。雨音がしはじめたのは気づいていたが、窓硝子が風に叩かれたので、やや荒れ模様になったのだろう。

シースは椅子から離れて窓辺に寄った。隙間から、吹き荒ぶ風が押し入るうと音を鳴らしている。

腰にある剣を、シースは確かめた。

「誰です、そこにいるのは」

振り返ったシースは戸口を突き通すように視線を送った。しかし、気配の所在には微かにずれがある。

その瞬間、燃え盛る暖炉が、ボウツ、という音とともに煙を吐いた。

シースは目を見張った。一瞬にして暖炉の火は消えた。が、そこから燃え移った炎に身を焼きながら、黒装束の男が歩み出てきたのだ。しかも苦しみ悶えるでもなく、炎は逆に屈伏したかのように消え去っていく。それにつれ、光は闇に。部屋は暗転する。消え入る最後の火が、黒装束の男が抜き放った半月形の短剣を光らせた。

抜き放ちざまに、短剣が襲いかかる。その太刀筋を、シースは予測だけで受けとめた。剣を鞘から走らせるのが少しでも遅ければ、シースの細い喉は断ち切られていただろう。咄嗟に抜いた彼女の剣は、それでもまだ半分が鞘のなかであったのだ。

部屋が完全に闇に落ちる。それでも、その一合によって弾けた火花の残光で目に焼き付いた像を頼りに、シースは斬撃を繰り返した。光が消えたかどうかの一瞬だ。並みの使い手ならこれで屠れただろ

う。だが、黒装束の男は一瞬の光が作り出した残像と同じ場所にいつまでも身を置くような簡単な相手ではなかった。

もはや視界は完全に失われた。唯一の勝機を逃したかもしれない身を床に転がして、こちらも場所を悟られぬ様子を潜めるべきか。だが、背後にはルセカーが横たわるベッドがある。

こんなとき風の音が恨めしい。わずかな物音が生死を分けるというのに、それを遮って刺客の味方をする。

唯一の味方は、部屋の広さだ。幸いそれほどに広くない。壁の両側までをシースの間合いは斬り込むことができる。もはやシースは、剣気を張って結界とするしかなかった。そこに踏み込めば斬る。必殺の気合いだ。

集中力は時間の感覚を鈍らせるが、目が闇に慣れてきた、それほど時間を生死の瀬戸際では長いというのか短いのか。

闇に慣れてきた目の視界に、かすかに黒装束の姿が浮かび上がる。

「シースティア！ 大丈夫か！」

その時、扉が開け放たれ、カンテラの光が部屋を照らした。その時ばかりは、カンテラの灯が太陽のようであった。

「お父さま！」

黒装束は、引き際とみるや暖炉に飛び込んだ。何か火種を残したのか、再び暖炉が燃え上がり追跡を断った。

「屋根だ！」

伯爵は従えていた騎士に命じた。二人の騎士がとって返す。

「二人では駄目だ。数を揃えて追え！」

外では彼に仕える騎士が警護に当たっているはずだ。呼べば十名ほどが集まるだろう。

「シースティア様、ご無事ですか！？」

「ルーヤ、あなたが報せてくれたの？」

「うむ、この子のおかげだ。私たちは見当違いの場所を守っていたようだ」

間一髪の危機に間に合って、伯爵は安堵の息を吐いた。

外を見回っていた伯爵の髪と服は雨でびっしょりだ。

ルーヤは、やはり自分の感性を無視できなくなつて人を呼びにいったのだ。そしてあわやの所でシースを救つたのであった。

「ありがとう、ルーヤ」

ルセカーが意識を取り戻したのは、それから数時間後のことである。

病気をしたとき、まわりの人間が優しくしてくれた経験は、たいていの人間が持っているもので、母親が誰か分からないルセカーにも覚えがあった。

流行りの病気で熱を出した時がそうだ。一週間寝たきりで、トリスや娼館の女たちが、献身的に世話をしてくれた。

使用人である今、そんな扱いを願ってなどいなかった身に、思いがけず気を遣ってくれる人たちがいて、ルセカーは少し困惑した。

意識が戻って、ソール・デレフ邸に戻るまでのあいだ、面倒を見てくれたのは口喧嘩の相手だったルーヤだった。

目は覚めたものの、身体はまったくといっていいほど動かず、そのままルーヤたちの宿舎を使うことになった。

「ほら、食事よ」

シチューをすくったスプーンが、ルセカーの口元に差し出されると、ルセカーは無言で口をひらき、ルーヤはスプーンを突っこむ。

「なんか、気味悪いな、お前に優しくされると」

「動けないくせに口だけは減らないわね」

ルーヤは口をへの字にして呟いた。そういう態度とると食べさせてあげないわよ？ と、言うてはみても、やはり動けないルセカーの具合は見ていて辛そうで、ルーヤは甲斐甲斐しく世話を焼いた。

三日ほどたつて、ルセカーの回復の度合いをみてソール・デレフ邸に戻すことになった。

屋敷に戻るときは、まだふらつく身体をシースティアが手ずから支えてくれた。

迎えの馬車は車内に寝床をしつらえてあり、旅のさなかに土のうえを寝床にしていたルセカーにはたいそうな贅沢に感じられた。

枕を背にして、すこし身を起こしたルセカーは、足元の毛布の裾をなおすシースをぼんやり見つめた。まだ熱っぽくて、論理的な思

考はなされていなかったのだけれど、熱の具合を確認めるシースの手のひらに触れられて、胸のうちがさざめくのはわかった。

「熱でつらい？」

寝着のしたで、身体が汗ばむを感じる。ルセカーは小さく首を振って眼を閉じた。

………… トリスみたいだ…………。

「なにか言った？…………」

シースは聞き返したが、ルセカーから返ってくるのは安心した寝息の音だけだった。

ルセカーが病床にあるあいだ、シースは一人で出仕することになる。屋敷の寝台の上でルセカーは気を揉んだ。

朝きちゃんと起きて、遅刻などしないだろうか。彼女は出掛ける前、帰ったとき、必ず顔を見せる。だが明日は？　ちゃんと無事にシースは帰ってくるだろうか。暗殺者は、いつか必ず彼女を狙う。そうに違いない。そんな心配をして、彼女の帰りが遅いと自分の世話をしてくれる侍女に、それとなくシースの所在を訊いてしまう。あくまでそれとなく、だけれども、それがルセカーの急性心配症から発しているのは見え透いていた。

「シースティア様のことを心配しているのね」

ルセカーと年の近い、クレアというその侍女は、そういつて微笑んだ。

「べ、べつに……………当たり前だろ、俺、いちおうシースの従者なんだから」

「うん。ありがとう、シースティア様のことを心配してくれて。私たちも、とても心配しているの」　クレアは、ルセカーがたいらげた夕食を片付ける手をとめて言った。「こうして悪いことが続くと、とても不安だから…………」

宮廷騎士シースティア・ラ・ソールには、顔が利く馴染みの店がいくつかあった。

それらは、彼女の仕事の役に立ったし、個人的にその店を利用することもあった。

「いらつしゃい」

老人の落ち着いた声が彼女を出迎えた。小柄で、人のよさそうな老人だ。頭髪は禿上がっていない代わりに真っ白だ。人柄が店の雰囲気にあらわれているようで、綺麗に整頓された店は老人の丁寧な仕事を思わせる。

壁にしつらえた棚には、道具類やちょっとした薬品類が並べられていて、一見なんの店かは検討がつかかねる装いだが、無論シースには勝手が知れていた。

「やあシースティア、仕事かね」

「いえ、仕事ではないんだけど、個人的に調べてほしいものがあるの」

「ほう」

老人は興味深げに、しわに引っかけたような眼鏡を掛けなおした。

シースは老人の興味を得たのを確認して、手にしていた棒状の包みを広げた。中から出てきたのは剣だ。長剣にしてはやや小振りだが肉厚があり、存在感が強い剣である。それはまさに、彼女が彼女の従者から預かった剣であった。

「ほほう、これはたいしたものだ」

シースから剣を受け取った老人は、両手で鋼の身を掲げて見入った。

柄から伸びる刃は手元で鉤状に広がって幅広になり、切っ先に向かって緩やかに細り、腕ほど長さで剣先へ曲線を描いて絞られている。柄飾りは、鉤状になった刃の付け根に対応して広がった細工がなされているが、これは柄飾りと刃の間に相手の剣を絡めとって碎

くという実用的な用途が与えられているようだ。

「これは、良い剣じゃな」

老人は一言で誉めた。シースは老人の講釈を聞いたことがあるが、それによる良い剣とは、長さと重量、それらのバランスを評価の基準としているものらしい。もちろん、素材や硬度などはまた別の話だ。熟練した使い手として、同感だった。

ひととおり見るべき所を押さえた老人は、眼鏡のレンズの間から上目遣いに視線を上げた。

「その剣、すこし調べてほしいの」

「ほう」

老人はこともなげに言うと、もういちど剣を見た。今度はたてに掲げてみる。

「よろしい、預かろう。これほどの剣なら、鍛冶匠や武器商人をあたれば、出所が分かるかもしれん。調べるのはその類のことで良いんじゃない？」

「ええ。でも、その剣は私にとっても預かり物だから、その事は忘れないで」

「あんたの信頼は裏切らんよ」

老人は言った。人間の言葉が持つ重さは、それを発するものによって異なる。時に一枚の紙片に記された文字よりも軽視されるが、シースは老人を信用した。

ことさら暗くなるのを待つて帰宅しているわけではない。ただ、宮廷騎士としての仕事が終わるのを、時刻が待つてくれないだけなのだ。そして、シースティアは暗闇を怖れるより、そこに身を浸して再び邂逅するのを心待ちにしている節があつた。あの日、エレの命を奪つたあの暗殺者と。

夜道をゆくとき、シースは暗闇に黒く猛々しい憎悪の心を曝け出す。闇があの中の記憶を否応なく彼女の脳裏から引き出すからだ。

思えばこの所、そんなどす黒い感情が自分の胸中を支配することはなかった。それはあの少年がいてくれたからであろうか。だが、その少年も、傷つき動けないでいる。それは、いったい誰のせいかな。『そのあなた。先刻から私の後をつけているようですが、早く用件を済ませてはどうです？』

シースは馬を止めて降りた。本気の斬り合いになれば、馬上は不利になる。逃げるつもりはない。エレが死んで、ルセカーが狙われた。相手の意図は分からないが、素性を明かさぬなら敵と見做しても間違いはない。これ以上、身内を危険にさらすわけにはいかないのだ。

シースは剣を抜いた。白くきらめく刀身は、シースの炎えあがる双眸とあいまって美しかった。

返答はない。ならば。シースは気配が潜む暗がり目掛けて駆けた。相手に動揺が走ったのが気取られた。完璧に身を隠していたつもりだったのだろうが、シースは過たず、そこを目掛けて間合いを詰めたのだ。

シースの白刃が気配の潜む物陰を襲う。気配の主は慌てて飛びさった。隠れみのに使っていた樽が、すっぱりと刃の通った筋道どおりの断面をつくった。

「ま……………待てッ！」

潜んでいた男はシースティアを制止したが、彼女は止まらなかった。立て続けの斬撃が男を襲う。男は大柄な体躯に似合わず、素早い身のこなしで躲し続けたが、シースが間合いを詰める迅さがそれを上回り、男はついに剣を抜いて受けた。

「待て！ 俺は……………！」

男は弁明を試みたが、シースは息をつかせなかった。

右！ 左！ 切り返しの迅い剣が男を守勢に押しやる。いずれ、必殺を狙う一撃がくるはず。それを読めて、流れを返せない。そして、来た！ 男の左胸を貫く軌道で、白刃は突きを閃かせた。その刹那、男はほぼ同時に突きを繰り出した。シースの突きの動作を目

で見てからでは遅い。彼女の挙動、必殺の気を察知してこそその技だ。そしてその技はそれだけにとどまらない。男は己が剣の柄飾りでシースの切っ先を受け、また自分の剣の切っ先をシースの剣の柄飾りに噛ませた。これで、会話するだけの余裕が二人の間に持てるわけだ。

男の技量は驚嘆に値した。シースの剣は神速である。それをこれほどまでに精緻な技で防ぐとは。シースは、心理のうちにかな敗北感が漂うのを覚えずにはいらなかった。

「落ち着け。俺はワーズ・ワスマイル。あんたのお父上とは盟友の仲だ」

男は名乗った。ルセカーと会った時の農夫姿とはまるで違う、本来の剣士の姿だ。

その時、初めてワーズは気づいた。シースの呼吸は荒々しい。恐怖のせいではない。それほどまでに、“敵”に対する殺意を体内に充満させていたのだ。

獣のように油断なく光るシースティアの眼に、ワーズはぞくりとした。

3（後書き）

携帯でも閲覧可能です。

よろしければご利用ください。

その夜、ルセカーは目を覚ました。身体の調子はずいぶん良かった。でも体中の力が抜けてしまったようで、完調ともいえない。

いつかのように、夜半に目が覚めてしまったようだ。邸内は静かで、あらゆる気配が寝静まっている。身の回りの世話をしてくれているクレアも、ルセカーが寝付いたので引きあげたようだ。

身体は、眠りから覚めるたびに回復しているのが分かる。手足が動くので、そろそろおとなしく寝てはいらなくなってきた。ルセカーは、体を起こして寝台の横に座ってみた。頭がふらついたりしないのを確認してから、裸足の足を床に踏みしめて立ち上がってみる。意外と平気だ。

ルセカーは扉を静かに開けて廊下を覗いた。

寝静まっている、そう思ったはずだが、廊下の一番奥の伯爵の間から明かりが洩れている。少し興味がわいて、ルセカーの足はそちらに向いた。

「……………“ギゼ”は、この件に関して手を引くつもりはない。が、かなりやばい橋を渡っている事も理解してほしい。もしかすると、殺された連絡役の口から、足がついたかもしれない」

明かりが洩れる隙間をルセカーは覗いた。円いテーブルの椅子に座る伯爵が見える。声の主は席を立っている様で、向き合った椅子には誰も座っていないかった。

「ところで伯爵、ルセカーは無事か？」

ルセカーはどきりとした。鼓動が迅くなって息苦しくなる。呼吸の音が気取られはしないかと不安になった。

「やはり気になるかね？ ギゼは」

優しい声色に、だが抜け目の無さがその言葉にはあった。

「意地の悪いことを言いなさんな。ルセカーのことを教えてくれたのはあんただ」

自分が話題となれば、立てた聞き耳にいつそう集中する。と、暗やみに潜むルセカーの口元を、何者かがふさいだ。

驚きはあった。だが恐怖は感じるまもなく、その必要を打ち消された。口をふさぐ、少しひんやりとした細い指先の手。屈んだ背に掛かる、柔かい温もりの重み。そして、耳に囁き掛ける声。間違はなく、それはシースだ。

「静かに……こっちにいらっしやい」

暗い廊下をシースの手に引かれて歩くのは、記憶の底にある何かを呼び起こしそうであった。その気持ちがなんなのか、いつまでも判然としないままルセカーは歩いた。

シースは自室にルセカーを連れていくと、椅子に座らせた。自分はテーブルを挟んで向かい側に座る。

「気分とか、悪くない？」

ルセカーは首を縦に振った。その代わり、別の要求が腹の虫から為された。

「わかったわ。ちょっと待ってて」

シースはにこりと頬笑んで席を立った。

灯りの少ない部屋に一人残されると、急になにかが物足りなくなる。心の狭間をすき間風がぬけている。

ルセカーはしばらくじっと座って青暗い闇を見つめていたけれども、ふと椅子から立ち上がって窓辺によってみた。

思ったとおり。闇が晴れて、月明かりがそそいでいる。こうして月をみていると、どうしてこんなにも胸が痛いのだろう。

ルセカーの胸は、いま闇夜に現われた月のように、満ち足りていなかった。

「……トリス……」

「ルセカー？」

どきり、とルセカーは振り返った。お盆を手にシースが立っている。

椅子に座って、二人は再び向かい合った。シースが運んでくれた

のは、夕食の残りのシチューとパンだった。

小さなテーブルに並んだそれらをルセカーが黙々と胃の中に収める間、シースはテーブルに片肘をつけてじっと見守っていた。はじめはルセカーの猛烈な食欲に目を丸くして。それから、優しく穏やかな瞳で包むように。パンの最後のひとかけらを飲み下して、その瞳に気づいたルセカーは、仕事を終えて空いたはずの口から、なにを喋ろうか悩んだ。

目の前の女は、女だてらに騎士で、素性の知れない自分に最大の保護を与えてくれる。いまもこうして、彼女は気恥ずかしさで居心地が悪くなるくらいの慈愛をそそいでくれていた。またか。まだ自分は、保護される側の弱い子供でしかないのか。じわりと胸の奥、感情の襞から悔しさ^{ひだ}がにじみ出る。そう思うとシースの瞳を見ていられなくて、ルセカーは俯いて顔を隠した。

「ルセカー……？」

膝の上で手を握り締めていた少年は、ふと何かを思った。

「剣を……剣を、教えてくれ」

「ルセカー……」

シースは切ない瞳で少年を見た。

「あなたは、騎士見習いだものね。でも、剣を取らなくても、生きていけるのよ？ 普通に暮らしていくなら、剣を持たないほうが幸せに生きていける。騎士にならなくても、この邸^{やしき}で働いていけるし……」

「剣が使えないと、守れない！」

守られてるばかりで、無力で、悔しくて。もうそんなのはごめんだった。

二人の間に、長いこと沈黙が横たわった。

そしてシースティアは、その日、頷くことはせず、ルセカーに眠るよう命じたのだった。

翌朝。明るい日差しが暗闇を取り払う。人の心からも。たとえ、表面だけであつたとしても。

口元にはこんだティーカップを離して、シースは小さい溜め息をついた。

「どうかしたのかね？」

食卓を挟んだ席で、ソール・デレフ伯爵は娘の様子を見兼ねて言った。十九の娘に悩みの一つあつてもおかしくはないのだから、溜め息一つくらいで年頃の娘の胸のうちに踏み込んだりはしない伯爵ではあつたが、シースの手が食事を止めるにつけ、ぼんやりとしては何かを考え込む素振り。そして溜め息とくれば、聞かぬのも気が咎めた。

顔をあげたシースは、伯爵が自分の顔を見つめているのにはじめて気づいたような顔だつた。

「……ルセカーが、剣を教えろというの」

「ほう、自発的にとは、いい事じゃないかね」

伯爵の言葉に、シースは少し眼を丸くした。

伯爵は、我が子に優しく微笑んだ。

「わかつているよ。お前が、まわりの者を危険な目にあわせたくないと思つてゐるのは。けれども、彼は騎士を志した。これまでの生き方も、想像するに、危険と隣り合わせだつたんじゃないだろうか。シースティア、お前の気持ちだが、彼を殺すことだつてあるかもしれないよ」

「それは……！」

「もちろん、彼はいい子だし、このまま我が家で働いてもらうのは大歓迎だ。あとは、お前がよく考えて決めなさい」

あの子は、きっと束縛すれば、反抗するだろう。一人で生き抜いてきた子だ。どうすればいいのだろう……。

「お茶を入れなおしましょうか？ シースティアお嬢様」

給仕の番をするクレアが、思考のうちに籠もりそうなシースに声を掛けた。気分転換してはいかがですか？ そう言つたのだ。

シースは、冷めたカップの中身を見下ろして、首を振った。

「いいえ、もう十分よ。ありがとう」

クレアの心配りを理解して、シースは微笑んだ。

「お父さま、ひとつ聞きたいのだけど」

「なんだね？」

「ワーズ・ワスマイルとは、何者なの？」

伯爵の表情が、ぴくりと反応したが、彼は隠さなかった。

「仕事の協力者だ」

「どういう？」

「彼には旧フローリア公国領の方で働いてもらっている。内容は、詳しく話せないがね」

ちょうど、シースティアが生まれた年のことである。サーキス王国は隣国で友好国でもあったフローリア公国を併呑した。ロークアーク地方の長引く戦乱により、大量の難民が流れこんだフローリア公国に対して、統治力不足と治安維持の支援という名目で派遣されたサーキスの軍勢は、公国の軍隊と一触即発の状況を作り出し、公国軍を暴発させて一気に武力制圧したのである。まったくもって強引な侵略劇だった。

この事件で政治的に功績があつたのが当時デレフ子爵だったシースティアの父ジョゼフだ。彼はその功績により、フローリア公国のソール子爵領を伯爵号とともに与えられ、ソール・デレフ伯爵となった。ただ、伯爵号は彼一代のみで、ソール子爵領は子孫の代で分家するように定められている。ソールは、デレフと隣り合わせではなく、飛び地だからだ。占領地の管理の苦労は並みではない。したがって、管理させる代わり、領地の倍増を報償としたわけだ。

「ソール子爵領か……」

ソール・デレフ伯爵領でフローリア公国側というと、ソール子爵領であるから、シースは必然的にソール子爵領に思い至った。

「では、“ギゼ”って？」

シースがそれを口にする、伯爵の食事の手が止まった。しかし、

動じた様子はない。

「盗み聞きとは、あまり感心しないな」

この邸でギゼという言葉が発せられたのは、昨夜のワーズとの会談でのみだ。伯爵の語調が、めずらしく、わずかだが厳しいものになる。それだけ重要な事なのだろう。

「ごめんなさい、自分の従者を躰けようとしたら、偶然聞こえたの」
一方のシースは、悪びれずに淡々と言った。

「ルセカーも、聞いていたのかね？」

「たぶん、ほんの少しだけよ。すぐに見つけたから。でも、許してあげて。自分のことが話されていれば、気になるのは当然だわ」

自分のことは棚に上げて擁護する。

「わかった。お仕置きはなしにしておくとしよう」

一瞬見せた厳しさが幻であるかのように、伯爵は冗談めいた口調で言った。

「でも、私の従者がお父さまのお仕事で話題になるというのは、私だって興味があるわ」

「当然だな……そう、彼はある時から、ある人間にとって、ただの少年ではなくなった、ということだろうか……」

結局、伯爵の口から聞けたのはそれだけだった。シースもシースで、取り立てて聞き出そうとはしなかったのだが。

出仕の時間もあるってシースは席を立った。気にもなるが父は話すまい。そう理解しているのだ。

身仕度を終えてシースが厩舎に足を運ぶと、なんとルセカーが馬装をすませて待ち構えているではないか。

「ルセカー、体調は大丈夫なの？」

「もう治った」

こくりと頷いてシースをやや見上げる眼差しは、連れていけ、でもなきや付いていくと訴えている。シースは、制止の言葉を飲み込

んで微笑んだ。

「行きましよう、遅れるわ」

王都サーキスの正門となれば、その出入りする人の数はただ一言に多い。百名に及ぶ門兵を含めた警備兵が、高くそびえる城壁上や、門の脇から目を光らせているから、怪しげな人間などは即座に取り調べられる。もちろん、本当に怪しむべき人間が目で見えてそうと分かる格好はしない。

人の流れのなかに、行商人が混じっていたとして、それを異物と見るのは不可能であった。

行商人こと、ワーズ・ワスマイルは馬車一台、品物を満載して王都を悠々とあとにした。

行商に出掛ける様にみえて、品物は仲間への土産だし、皆に必要な物資だ。何よりの土産は、伯爵から得た情報である。

『近々、リシャール王子の命令で、大規模な軍事行動が旧フロリア領で予定されているそうだ』

『目的は反乱分子の殲滅か？』

『最終的にはそうなるだろう。具体的には正式に命令があるまでわからないが……』

『これは、ギゼに戻る必要があるな。万が一の準備もせねばいかんだろうし、フロリア再建派の連中に教えてやらんとな……』

『ギゼは動くのかね？』

『正直、迷ってる。ルセカーなら……もちろん、ちびじゃない方だが、あいつならどうするだろうとか、色々考えるがな。俺には決めかねるよ』

昨夜、伯爵の前で冗談めかしく肩を竦めてみせたが、決断のときは迫っている。

器じゃねえなあ。ワーズは、春の青々しい空を、あきらめに近い心境で見上げた。

お城への道を、ルセカーの供で歩くのは久方ぶりであった。少年が元気になったというのは嬉しいことである。しかし、彼に剣術を仕込むのには、少なからず迷いがあった。そもそも、ルセカーは騎士を目指すために騎士見習いになったのだ。剣の道を避けては通れない。なのに今になって、彼に剣を持たせることに、これほどの抵抗感があるのはどうしてだろう。

道々、シースは無口だった。ルセカーの、元来の寡黙さもあって、道中ひと言も二人は交わさなかった。

いつもと同じように騎士門をくぐろうとしたシースティアの耳に、門兵が騎士長の召喚を報せた。

シースがルセカーに馬を預けて城内に入ると、先程の門兵がルセカーを手招きした。若い兵士だが、シースとルセカーよりも年は上に見える。

「なあ、シースティア様、ぼんやりしてるみたいだが、気をつけるよ?」

兵士の言葉に、ルセカーは首を傾げた。

「ソール・デレフ家はいま危ないんだろう? こういう時にあんな気の抜けた顔されると、心配になっちゃう」

ルセカーは力強く頷いた。シースの従者である今の理由は、そこにある気がする。なんだか知らないけど、世話になってる家が困っているのは、見過ごせないことだ。

「旧フロリア領で演習?」

騎士長執務室での通達事項がそれだった。内容に関しては寝耳に水である。

「そうだ。部下にあたる従騎士、従者に伝達するように。準備も含めての訓練だ。ぬかりないようにな」

面食らった様子のシースティアに、騎士長は重ねて言った。

「しかし騎士長、フロリアの反乱分子を刺激しませんか？ 彼らの活動は未だ根強いと聞きますが」

「王太子殿下のご下命だ。家臣団でも十分に吟味が為された。その判断だ」

「殿下の……」

リシャルの……。

かれこれ十数年。リシャル王子の築き上げた実績と信頼によって、人々は知らず知らず、手放しに彼の指示に従うきらいがあった。騎士長にしても、文武にすぐれ、騎士団をまとめあげる人格もそなえた人物だが、型にはまり過ぎているのかもしれない。

脳裏に恋人の面影を浮かべたシースは、執務室を出たあとの行き先を決めていた。

馬を厩舎に預けてきたルセカーは、いつもどおりシースティアの部屋で彼女を待っていた。病み上がりの今日は、特に用を言い付けられなければ仕事がない。手持ち無沙汰のなぐさめに、ルセカーは剣を持つ想像をして、握りや構えを確かめたりした。今までは運動神経や勘に頼った我流だったが、手練れを相手にするにはあまりにも経験不足だと感じるのだ。

「ルセカー、いる？」

扉が開くが早いのか、シースが呼んだ。

「なあ、剣を……」

「まだ用事が終わってないの。ルーヤの手伝いでもしておいて。いろいろ助けてもらったでしょう？」

言い終わるや、シースはそのまま廊下を歩いていく。ルセカーは戸口を出て呼び止めた。

「どこへ行くんだ？」

「リシャル殿下のところよ」

一瞬、ルセカーの脳裏は空白になって、そのあと無性に体を動か

したくなつた。シースの言い付けなどは、そのイライラに流されてどこへやらだ。

「剣くらい教えてくれればいいのに」

ぶつぶつと呟きながら、持ち出した訓練用の木剣を庭で振るのであった。

リシャルの侍従に、自分のことがどう伝えられているのかは知らないが、シースティアは執務で忙しいはずの王子にすなりと面会することができた。

侍従がさがるや否や、シースは本題を切り出した。

「旧フロリアで演習を行なうそうですね」

「うん。騎士長から聞いたのだね？」

リシャルは、執務室の机に腰を寄り掛かせると、肩にかかる長い銀髪を手櫛で掻きあげた。銀髪にくわえ、美的均衡の取れたあごの輪郭で囲われた容貌は、万人がみとめる貴公子の姿であった。

日頃の忙しさを感じさせない緩やかな口調で、彼はシースに理由を語った。

「無論、危険はある。演習がそのまま実践に変わる可能性がね。でも、それは望むところなんだよ」

「反乱分子をいぶりだせば良いということなの？」

「そういうこと。我が騎士団の練度は、そういう事態に十分対応できると信じている」

「それは騎士長にいつてあげて。よろこぶから」

ふふつ、とシースは微笑をこぼす。

「ところで、騎士長に別の仕事を書面で回したのだが、聞いているかな」

「いいえ。どんなこと？」

「宮廷騎士に調査してもらいたい。私の直属の部下が殺された」
ただならぬ内容にシースの眉根が寄る。

「場所は、王都の城壁外。計画農作地の水車小屋で死体が発見された。見つかったのは四日前だが、連絡が途絶えたのは一週間ほど前からだ」

シースティアは記憶の中から情報と符合するものを探した。

「一週間前……ルセカーが襲われたのと同じ頃だわ」

思い当たるのはそれだけ。関連性は薄そうだ。情報は追って探さなければ事件には役立つまい。

「ルセカーというと、君の従者だね？ 無事なのかい？」

「ええ、一時は危なかったけど、今は元気よ」

「すまない、気づいてあげられなくて」

シースティアをいたわる様に、リシャルはその頬に触れた。彼とて彼女の前の従者が死んだのは知っていた。

「いいの。心配掛けなくなかったから」

頬と首筋にかかる手が、とても心地よかった。

「しかし、そうとなるとこの王都に、物騒な人間が入り込んでいるということになるね」

「物騒な……人間……」

ワーズ・ワスマイル。あの怪しげな人物の名が真つ先に思い浮かぶ。すると、脳裏に符合したものが、奇妙な繋がりを思わせて怖かった。父ジョゼフすら、その系に絡まってくるのだ。

「どうかしたのかい？」

シースティアの顔色はすぐれなかった。

「血なまぐさい話はここまでにして、お茶でも淹れさせよう」

騎士団棟の中庭で、ルセカーは黙々と訓練用の木剣を振っていた。「元気になったのは良かったけど、剣が振れるくらい治ったんなら、ちよつとは手伝いなさいよ」

通りかかったルーヤが、小言を投げかける。うるさくなりそうだったけど、さっさと行ってしまった。

「まったく、誰が面倒見たと思ってんの。曲がりなりにも女子寄宿舎の部屋の寝台を貸し与えたっていうのに」

と思つたら、あちこちをいったり来たりするたびに、中庭を通りかかる。

ルーヤは、書類を運んだかと思えば、誰かに呼ばれてそちらへ駆けて、誰かに請われてはそちらへ走った。

「いいご身分ねえ。一週間ぐうたら寝てたと思つたら、今度は健康的に運動なんてえ」

通つては一言残し、ルセカーは剣を振る風鳴りでそれを掻き消す。「ま……まったく、ほんつ……とに、もう！」

力の入った声で、ずしずしという足音が聞こえそうな歩みとともに、ルーヤは再び通りかかった。今度は鎧を運んでいるのだ。大の男が、体にきつちりと当て着込んですら重たい鎧だ。少女が手に提げて容易に運べる重さではない。

中庭に面した廊下の手すりに一旦重みをあずけて呼吸を整えているルーヤに、ルセカーは観念して声を掛けた。

「わかった。手伝う」

その一言を引き出したのだろうかと思つていたのに、ルーヤは突っぱねた。

「いいわよ、あんたの手伝いなんか。中途半端な仕事されるて尻拭いするほうが面倒なんだから」

今回ばかりは、明らかに強がりである。

「そんなわけ、いかないだろ」

言い出したからこそそう思うが、鎧運びはルーヤには荷が勝ちすぎた。

「いいから！ 武骨モノは剣の練習でもしてなさい！ あんたが、一番シースティア様のお側にいるんだから！」

あ、とルセカーは少女の気遣いを理解した。と同時に理解に苦しむ顔をする。

「じゃあ、なんで不機嫌そうなんだ」

「腹が立つのも本当だからよ！」

ずしずしと、再び歩き去るルーヤであった。

騎士団棟の中庭で、ルセカーは黙々と訓練用の木剣を振っていた。少女従者の心情は分かっていたような分からなかったような。でも、心意気は汲み取った。木剣の素振りにも力が入るといふものだ。

「なっっちゃおらん」

その声に、揚々とした気持ち台無しになった。

中庭は、騎士団棟のどこへも通じている。その男の目に留まらずに済むわけもなかった。

シースティアの目の上のたんこぶ、と酒場の主人が評した。それを思い返すと少し頬が緩む。そこへすかさず不機嫌にさせる台詞を突っ込むのも、ガブレイという男のなせる業ということか。

「そんな腕では暗殺者が襲ってきても倒せんぞ」

むっとした顔つきでルセカーは睨み返した。

「面構えだけは、一人前だな？ どうだ、稽古してやろうではないか」

ガブレイは、木剣を携えていた。端からそのつもりだったに違いない。

ルセカーが構えると、罨にかかった獲物を見るように、ガブレイはにやりと笑った。

次の瞬間、鋭い風鳴りとともにガブレイの剣が繰り出されると、ルセカーの目に留まる前にそれは手を打ち、あっという間に剣を落としてしまった。

ルセカーの頬を、剣を落としたことを罰するようにガブレイの木剣が打つ。手首を使ったそれは、鞭のように頬を叩いた。ガブレイが本気であれば、頭部を殴られて昏倒していたはずだ。本物の剣であれば首が飛んでいる。

「拾え」

ガブレイは余裕を見せた。当然だ。彼はルセカーに相対してから

一步も動いていないのだ。

これが修練を積んだ騎士との実力の違いであった。ルセカーは身体能力と、状況に対応した勘と捨て身の動きで危機は乗り越えられても、真っ向から剣の技量をぶつけ合うことを知らないのである。ガブレイの精神性はどうかあれ、その剣は正統なものであった。

まだしびれる手で剣を拾う。両手でしっかりと持たないと、打たれた手は握力が感じられなかった。

右、左、ガブレイの打ち込みがルセカーの腕、足、動を叩く。体は反応するが剣さばきが追いつかない。

「どうした、打ってこい」

打ち込みをやめて剣を下ろしたガブレイに、ルセカーは思い切り剣を振り下ろした。だが、その剣を打ち返され、見事に足を掬われて地べたに転んだ。

砂をなめるルセカーの頭をガブレイは踏みつけた。

「どうだ小僧。騎士になるのは諦めて、ここから出て行くか」
歯を食いしばって力を込める。

「あき……らめない」

足を払いのけて立ち上がったルセカーは、再びガブレイに打ち込んだが、一つ空を切ることに、二つ三つと体を打ち据えられることの繰り返し。ついに腕が上がらなくなったルセカーは剣を抱えるように体ごと突きを繰り出した。切っ先が迫らんとする寸前で、ルセカーの突進をガブレイは一振りして叩き伏せた。ルセカーの意識は、そこで暗転した。

「ふん、身のほどを知れ」

台詞を吐き捨てたガブレイだが、いつの間にか息が上がっていた。

夕方、宮廷騎士シースティア・ラ・ソールは痣だらけの従者をしたがえて騎士門を出た。

はじめ驚いたシースティアは、ルセカーの傷をあらためながら話を聞きだした。そして、これだけ打ち据えられていながら骨折がないことに、ガブレイもさすがの宮廷騎士であると認めざるを得ない心境となり、さらに病み上がりが今度は怪我人と成り果てた少年に呆れて、ガブレイへの沸騰した怒りは直ちに収まった。

打撲の痛みにぎくしゃくと歩く従者を、馬上から見かねてシースは言った。

「今日は特別に乗りなさい」

「う、いい。誰が、この程度の、傷で」

ありありと分かる強がりには、文節ごとに痛みを堪えなければならなかった。

「そうじゃなくて、そんなんで馬を曳かれたら、お尻が痛くてしかたないのよ」

たしかに、いつかのように馬脚は乱れるばかり。そしてこの歩調ではいつ邸にたどり着くか分かったものではなかった。

「さあ、早く乗って。あなたの歩く速度に合わせてられないわ」

ルセカーは眉間にしわを寄せてシースの差し出す手をしばし眺めていた。

「よっかつてもいいわよ」

手綱と、それを握る腕の輪の中に収まった

「冗談……………だろ」

「あ、そ」

シースは乗馬を歩かせる。すると歩むたび、ぴしぴしと傷が痛み、腹筋に力を入れる事さ

え辛くなった。観念したルセカーは息を吐いてシースの腕の中に寄

り掛かる。肌の香りと

ぬくもりが いい 様もなく心地好い。それだけで痛みが引くようだった。

シースは何も言わずに、どこか懐かしい調べを口ずさんだ。

「どっかで、聴いたような曲だな」

「そう？ 即興よ」

楽しげにシースティアは答える。

「ふうん……子守唄になりそうだ」

「眠りなさい。帰ったら、起こしてあげるわ」

ルセカーは返事に窮した。守らなくてはならないのに眠ってなどいられるか、そう思うのだが、痛み根負けして体は睡魔を受け入れてしまいそうだった。

「今晩は熱が出るかもしれないから、辛くなったら我慢せずに呼びなさい」

いつの間に眠っていたのか。気づくとまたルセカーはあの時のように寝台の上で、暗闇の中の四角い明かりの中から、シースがそつと声をかけて扉を閉じたのに気づいた。気づいてまた、眠りに落ちた。

翌朝の出仕の時刻に、シースはまたしても独り馬上に在った。

騎士であれば当然従者が焼くはずの世話を、侍女のクレアがしてくるので遅刻の心配は無い。かつてであれば、クレアはエレという少女従者の立ち位置に遠慮してシースティアの身の回りに踏み込んでこなかったものだが、これもルセカーが従者として邸の一員に加わった効果だろうか。

ああ、こうして人の心は癒されていくのだな、とシースは睡魔を抱えた脳裏で客観視していた。

何も知らないルセカーが、エレの死によってできた穴を埋めてしまった。だから、クレアもシースティアの傷に触れてしまうことを恐れずに世話ができる。

騎士門に着くと、見慣れた門番が彼女を出迎えた。

「あれ？ シースティア様、今日はルセカーのやつは？」

門番が、少年の名前を出して気に掛けているのに、少なからずシースティアは驚いた。

「ガブレイ殿にこてんぱんにやられて、寝台に逆戻りよ」

そんな朝の挨拶が始まった一日。同じような質問を、騎士団棟のなかでも耳にすると、素直に感心する。

「やあ、従者殿は今日はお休みだった？」

例えばそんな同僚の軽口であった。

いつのまにか、我が従者は自分の身の回りの人々に慣れ親しんでいるようだった。

お昼時、中庭で休憩しているルーヤを見つけて声を掛けたシースティアは、その事を話してみた。

「ドタバタして目立っているだけですよ」

二人は中庭にお茶とお菓子を用意して、お喋りの態勢を整えた。ルーヤはシースティアの言葉を一刀両断。そんな風に評される少年

に憐憫の情すらわきそうだ。

「でもまあ、あいつには感謝もしてるんですよ」

「あら、どうして？」

「だって、シースティア様が、明るくなったから」

照れを隠すように、ルーヤはティーカップに口をつけた。

「そう……なの？」

それは新鮮な驚きだった。

自分自身は、気丈にしているつもりだった。そんな自分をいたわってくれる周囲に気づかず、そしてまた心の傷が癒えていく自分を、好ましく見てくれている人がいたとは。

「そうかも……」

あのぶっきらぼうな少年は、いつの間にか我が家に馴染んで、父娘だけでなく、使用人たちにも気に入られてしまった。

エレがたおやかな花なら、あの少年はまっすぐ伸び育っていく若木だ。いつか大樹となって、木陰にひとを休ませてくれるような人物になるかもしれない。

「ありがとう、いい話を聞かせてもらったわ」

カップを口元に運びながら、シースティアは言った。湧き上がる湯気が、頬に当たってこそばゆい感じがした。

その日の帰り、シースティアは早々に仕事を切り上げて、街中の店に立ち寄った。

戸を開け、薄暗い屋内に足を入れる。差し込む光は十分にあるように、目が慣れると暗がりもほど良い。棚に並ぶ薬品のことを考えて、光と熱をあまり入れないようにしているのだろう。

「やあ、シースティア」

店の奥からその姿を確認した老人は、一度奥に姿を消すと包みを持って現れた。

「こいつは、大した代物だ。ルセカーの剣だよ」

無骨な鞘から、同じく飾り気のない柄を握って刀身を引き抜く。

「ええ、たしかにこの剣の持ち主はルセカーという少年だけれど」

「お前さんの従者がルセカーという名前というのが偶然かどうか儼には分からないが、これはあのルセカーの剣だ」

老人が刃を光にかざすと、鈍い光を反射した。

「どういうこと？」

「ロークアークの騎士ルセカーだよ。最も新しい伝説の騎士の剣だ」

「それで、あんたの依頼の通りに、分かることは全部調べた」

老人は少し難しい顔をして息を吐いた。

「剣とは、確かにそうする為に作られたものだが」

「なに？」

実用一点張りにも見えるルセカー剣を、老人は名残りを惜しんで鞘に収め、布に包んだ。

「この剣は、ごく最近、人を斬っており。多分、相手は死んでおるはずだ」

それはつまりどういうことなのだ。

「そんなはずは……」

この剣は、ルセカーの持ち物ではあるが、自分が預かり保管している。その事実から、ありえないと即座に否定したが、埋めがたい穴がその事実にあることにも気づいていた。

シースは老人の顔を見た。

老人は、顔を横に振る。

「僕は、考える材料を提供する。じゃが、この先を考え、判断するのは僕の仕事ではない」

その言葉は脳裏に反響するばかりで、もはやシースの思考には達していなかった。

この剣は、先日一度だけ、少年の手に返されている。その一日の空白が、どうしてもこの剣の殺人を否定できない。

そして、彼は命の危険をとまなう傷を負って帰ってきた。

そうだ、彼を襲ったのが複数人であれば、そして少年がその一人を屠っただけであれば。

だが。

彼は何をしに出かけた？

父の使いで、いったいなにを？ 疑惑が父親にまで波及する。

シースティアは、行きづまり、よどむ思考を振り払った。

「調べてくれてありがとう。お礼はまた届けさせるわ」

ルセカーの剣を受け取って彼女は背を向ける。長い髪がすべるその背中を、老人は呼び止めた。

「情報を一つ。剣を調べているときに聞いた噂だ。いま、ルセカーは旧フローリア公国にいて、商人が言っていた」

一度立ち止まったシースティアは、振り向かずと言った。

「また来るわ」

ルセカーが目覚めた昼下がりの邸は、とても静かだった。前に寝込んだときも同じだったから解る。使用人たちも、ひととおりの仕事を追えてめいめいに過ごしているのだ。

体調はすっかり良くなっていた。もちろん、あちこち痛むけれど、活発な少年の体を妨げるものではなかった。

寢台を抜け出し、部屋を出る。従者としてあてがわれた、シースティアの寢室の小さな隣室であるが、そこは伯爵の部屋にも近い。窓からいっばいに日の差し込む廊下は、無人で人の気配はなかった。

そつと廊下を歩きだす。

「やあ」

と、予期せぬ声にルセカーの心臓は跳ね上がった。

「具合はどうかね」

ソール・デレフ伯爵が、ちょうど差し込んでいる日差しのような朗らかな笑顔でそこに立っていた。まったく気配を感じなかったというのに。

そつといえば、伯爵はデレフ子爵であった頃、騎士として戦場に立ったこともあるのだと、古株の使用人から聞いたことがある。実は相当の強者なのではないかとルセカーの頭の中で思考はめぐった。「体調がよければ、中庭で一緒にお茶にしないかね。部屋で寝てばかりでは、気持ちが悪むだろう」

断る理由を探す前に、ルセカーの首はたてに動いていた。

白いテーブルに白いカップ。クレアが穏やかな表情で注ぐお茶から湯気が昇った。

一礼して辞去するクレアを見送ると、ルセカーは伯爵に勧められ

るまま、カップを口に運ぶ。

その表情をみて伯爵は笑った。

「苦いかね？ 砂糖を存分に入れたまえ」

伯爵は砂糖の入れ物をルセカーの前に置いた。

「苦味の旨さは慣れたと私は思うのだよ。砂糖の量を少しずつ減らして、次第に茶の味を直接知っていく。苦味のなかに、旨さを探せるようになる」

そんな日が来るのだろうか、ルセカーは即座に疑った。

「人生も、この齢に至って、そうしたものではないかと思うようになったよ」

そう言って、伯爵は何も足さないお茶に口をつけた。

「この家を頻繁に刺客が狙っている」

ひとくち。ゆっくりと味わってカップを皿に下ろした伯爵が発した言葉だ。

「君も身をもって体験してしまったし、エレの事も耳に入っていることだろう」

ルセカーのお茶も、あまり減っていなかった。砂糖で苦味は消したけれど、熱いお茶は勢いよく飲めなかった。熱さ以上に、エレの話題を暢気にお茶を飲みながら聞いてはいられない。

「ルセカー、君に頼みがある」

伯爵の目は穏やかに、しかしとても真剣だ。

「あの子を守ってくれ」

それは当然だ。でもルセカーは安易に頷かなかった。拒むつもりはないが、伯爵の真意はより深いところにあると、肌で感じ取ったからだ。

「何が敵で、何が味方かわからない状況であっても、君だけは、あの子の絶対の味方であって欲しい」

何が敵で、何が味方か……だが、そういう口ぶりの伯爵には……。「何が敵か、知っているように聞こえる」

静かに少年を見つめたあと、伯爵は微笑した。

「例えば、あの子が君を敵と見なして、命を奪おうとしても、君は眞実あの子の味方でいて欲しい」

とんでもない仮定の話に、ルセカーは一段ずつ踏まえてきた会話の階段をがくと踏み外した。

伯爵は少年が心の態勢を立て直すのを待つように、お茶で口を湿らせる。

「本来、それは親の役目なのだがね」

沈黙を、お茶に混ぜる砂糖のように空気に溶かしながら、伯爵は言葉を継いだ。

「新しきルセカー、どうか娘を守って欲しい」

少年の瞳を静かな瞳で見つめて、ソール・デレフ伯ジョゼフは言った。ルセカーは、胸の中で伯爵の言葉が反響しながら跳ね返るばかりで、うまい返答が思い浮かばなかった。なにか、言葉を返してあげなければいけない。それも今この場で。強烈にそんな想いに駆られるのに、何も出て来ない。

伯爵はルセカーの様子に微笑むと、その言葉を残したまま席を立った。ルセカーは座ったまま、伯爵の心情を考えつづけた。わからなかった。

最後に、すっかり冷え切ったお茶を一息に飲み干す。砂糖で甘いはずなのに、どこか渋味が消えなかった。

11（後書き）

感想などお待ちしています。お気軽にご感想ください。

四章 フローリア

1

王都サークの城門をくぐった騎士と歩兵の列が、整然と街道を西へと出発した。

目的地は、十九年前にサーキス王国が併呑した旧フローリア公国領である。

サーキス王国の王都サークから、旧フローリア公国領での演習に進発した一個軍は、現地に駐屯する騎士団を加えて八〇〇〇名に達する予定であった。

現在は合流前の六〇〇〇名が行軍している。正騎士、従騎士、従者を含めた歩兵、輜重などの荷駄が整然と列を成して街道を進むのは威容であった。街道を行く人々や、通過する村や町の人々が、珍しげに手を振ったり見物したりした。

実戦ではなく、演習であることが噂で広まっている様子で、人々が不安に陥ることはなかった。

また、実戦でないことは行軍する側の精神も少し気楽にさせた。人々に手を振り返し、笑顔で表情をほころばせ、上官も隊列さえ乱さなければあまりそれをとがめだてなかった。

そんな気の緩みがちな列のなか、馬上で気のない表情をシーステイアはしていた。

『先日の質問を繰り返すのだけど……』

昨晚、帰宅した彼女は父の私室に赴くなり、ジョゼフに心に決めたように訊ねたのだ。

『ワーズ・ワスマイルとは何者なの？』

『言ったはずだ、仕事の協力者だ』

『そう……では、こないだはルセカーになんの使いをさせたの？』

『ただのお使いだよ』

『うそ』

『嘘ではない』

シースの脳裏には、ある疑惑が渦巻いていた。リシャル王子の部下が殺された。ちょうどルセカーが『ルセカーの剣』を持って、父ジョゼフの使いに出かけた頃だ。ルセカーは重傷を負い、生死を彷徨った。だが、一方で彼の剣も人を斬っているという。

なぜ、少年はなにも言わないのか。きっとジョゼフの言い付けを守っているのだろう。それはわかる。

そして、あの怪しげなワーズ・ワスマイルという男の口から出る、ルセカーの名。それにギゼとはなに？

ジョゼフは優しい父親であるが、伯爵としての立場もあり、政治的な駆け引きから無縁ではられない。それがまさか、自分と愛し合う人の障害となる事であったとしたら？

嘘ではない、そういう父親の顔は、聞き分けのないことを言う子供を叱る目をしていて、従順であることを強要する。その裏に、いつも自分への優しさがあったことをシースは知っているし、今も変わらないと信じたい。

「わかった……明日から、演習でしばらく帰れないから」

「ああ、気をつけて行きなさい」

そっという父に背を向ける。ジョゼフがどんな表情なのか

「……シースティア」

呼び止めたジョゼフの気持ちはわからない。ただ、どこかで苛々が抑えられなくて、呼びかけに応じはしたけれど、立ち止まっても振り返りはしなかった。

父から言葉が続かないのを見計らって、シースは後ろ手に扉を閉じた。

「シース……シース」

その声で、シースティアは昨夜の回想から無理やり現実を引き戻された。騎乗する彼女の横を歩くルセカーを、彼女は見下ろした。

「ルセカー、無駄口は禁止よ。ほかの者の気が緩んでいても、あなたは新入りも新入りなんだから」

暢気な行軍は列こそ乱さないものの、サーキスの領内を歩くうちにすっかり遠足気分だ。

一部の事情を知る宮廷騎士たちはさすがにだらけはしなかったが、目的地までは気を張る必要もなしと、兵や部下を叱ることもない。

だが昨日の苛立ちを引きずったシースは、ルセカーに寛容でいられなかった。

「今日の野営地に着いたら、剣を教えてくれ」

またなの、いつもの彼女であれば、溜息まじりにあしらうところだ。今日の彼女は、ルセカーの腰にある剣を横目に見た。

他の従者たちは、簡素な槍と短剣を身につけているが、ルセカーの腰には短剣ではなく、いつもはシースが預かっているあの剣が提げられている。

「だめよ。言うことがきけないのなら帰りなさい」

にべもない言葉に、ルセカーは黙るしかない。

野営地に到着し設営の手伝いが終わると、ルセカーは一人抜け出して剣を振ることを、この演習での日課として自分に課すことにした。

翌日から、きわめて事務的なやり取りでしか、シースティアと会話をしなくなった。

もともと寡黙なルセカーにとって、それは苦痛ではなかったが、以前の様にそれが自然とも感じられなかった。

そしてまた野営地に着き、言いつけた用を片付けたルセカーが、

いつの間にかいなくなることをシースティアも気づいていたが、憤りはなかった。やることを済ませたならば、それでいい。少年を見ると、あの疑念がどうしても頭の中で黒々と渦を巻いて嫌だった。

設営した陣地から離れた物陰を見繕ってルセカーは剣を抜くと、素振りを始めた。

本当のルセカーから剣を受け取って以来、そう何度も使うことがなかった。しかしこうしてたった数日、何百と振っただけで腕や肩、背中から腰まで剣を振るうということに体が馴染んでくるのが分かる。

剣の重さに慣れて、ぶれることなく思った筋どおりに刃が空を断ち切る。

今ならあのガブレイにだって負けない、いや勝てないまでもそこまで一方的ではないはずだ。

「なっっちゃおらん」

脳裏に描いた人物の声に、ルセカーは驚いた。

片方の腰に手をあてて少年の素振りをしばらく観察していた節がある。そして、もう片方の手には、なぜか木剣が二本あった。

カラン、と木剣を地面に放り投げ、自分の剣を抜くと、ガブレイは自分の剣を抜いて構えた。次に上段に構え、踏み込みとともに振り下ろす。岩をも割るかのごとく、ごう、と音をたてて、その騎士の剣は空気を断ち切った。

明らかにルセカーの剣とは違った。ルセカーの剣は、道具がただ人を殺す。決して技が相手を倒す訳ではないのだ。

ガブレイは顎でルセカーに促がした。

ルセカーはよくわからないまま、ガブレイを真似て剣を振り下ろす。

ガブレイのそれとはまったく違った。猿真似だ。もう一度、もういちど！ ルセカーはむきになって繰り返し始めた。

ガブレイが、再び剣を上段に構える。さっきと同じ構えだ。ルセカーはぴたりと素振りをやめ、息を止めて見守った。そしてガブレイがもう一度だけ一連の動作を繰り返した。やはり、ルセカーとは違う風が舞った。

ルセカーは、脳裏に焼き付けた動きが消えてしまわないうちに、反復を始めた。

いったいどのくらい、それに熱中していただろう。二本の木剣を残して、いつのまにかガブレイの姿はなくなっていた。

慌てて野営地に帰ると、とつくに夕飯の炊き出しは終わっていて、シースティアからは飯抜きが言い渡された。幸い、空腹よりも興奮が勝り、興奮が収まると疲労による睡魔が勝って、ルセカーは翌朝までぐっすり眠ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9741c/>

ルセカーの章

2010年12月22日16時10分発行